

第 48 回 公開研究発表会

**2016**  
6.18

# 英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (21)

個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (15)

## 発表会要項

---

聖徳学園小学校  
聖徳幼稚園

## 教育目標

- 1 一人ひとりの子どもの個性を育てる
- 2 知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる
- 3 豊かな感性と自立心を育てる

## お誓い三か条

- 一、われわれは 未来をひらく戦士となり  
新しい世界を 開拓します
- 一、われわれは 恥と涙をわきまえて  
光明正大に 行動します
- 一、われわれは 祖国の伝統を重んじ  
祖国と人類のために つくします

# 発表会要項

## 主 題 英才教育の追究

- 創造的知能の開発と育成 (21)
- 個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (15)

- 平成 27 年度全日本学生児童発明くふう展において「豊田佐吉賞」受賞
- 平成 27 年度東京都児童生徒発明くふう展において 28 回目の「学校賞」受賞
- 第 32 回植物画コンクールにおいて 3 回目の「特別奨励賞」受賞



# 幼稚園



自然体験教室（年長）



知能あそび



お店屋さんごっこ



自由あそび



# 小学校



スポーツ大会



林間学校



運動会



聖徳祭



百人一首大会



新入生を迎える会

## 第 48 回 公開研究発表会に当たって

～知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育～

聖徳学園小学校長 和田知之  
聖徳幼稚園長

「氷が溶けたら何になる？」という問いに対して、「水になる」という答えだけではなく、「春になる」と言った柔軟な発想を大切に育てていきたいという願いで、昭和44年（1969）に、個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を開始しました。以来47年間、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を目指して、

- 主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成
- 知能開発～創造的知能の開発と育成～
- 一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～

を重点にした教育活動を重ねてきました。

### ●意欲と集中力の育成で知能と学力の向上

我が国では最近、小学生から大学生に至るまで学力低下の問題が話題になっています。その原因として、子どもたち自身の学習意欲と集中力の低下が大きな要因ではないでしょうか。

知能や学力の向上はもとより、子どもたちが将来社会で活躍していく上でも重要な資質は意欲と集中力になるとの考えから、私たちは幼稚園から小学校低学年までは、まず意欲と集中力の育成に重点をおいています。積極的な意欲と集中力のある子どもの場合は、仮に学校での学習時間や内容が少なくなっても、それこそ「1教えたら10学ぼう」とする意欲を発揮して、自分から主体的に学習を進めていくことができ、また習得率も高くなるからです。

入園したばかりの年少児（3歳児）の知能あそびを見ていると、一つの遊びに集中できる時間はせいぜい15分から30分程度です。なかには、教師の説明はほとんど聞

けず、周囲のことが気になり立ち歩くなど、なかなか集中して取り組めない子もいます。それが3学期頃になってくると、ほとんどの子が40分ぐらいは集中が持続出来るようになってきます。年長児（5歳児）になると、与える教材（遊びの内容）さえ適切であれば、80分間の知能あそびの時間が過ぎて昼食の時間になっても、「もっとやりたい！」言って、遊びを継続することもしばしばです。

このように幼稚園時代は、一人ひとりの子どもをよく観察していると、見違えるように意欲と集中力が身についてくることが分ります。この幼児期の3年間の成長は、小学校入学後の3年間の成長の比ではありません。特に、高学年になっても意欲と集中力が十分身についていない子どもの学習指導は、大変苦勞が伴います。ですから、私たちは幼稚園と小学校の指導上の連携を深め、3歳児から3年生ぐらいまでは、意欲と集中力の育成、つまり主体的に学ぶ態度を育てることに重点をおいているわけです。

こうした意欲と集中力を育成していくためには、日頃から授業（遊び）研究を深め、授業内容や方法に工夫が必要になることは言うまでもありません。子どもたちが授業（遊び）に意欲的に集中して取り組む条件としては、

- 学習（遊び）内容に興味・関心があること
- 難易度が適切であること
- 学習内容に発展性があること

等が重要な要素になってきます。ですから聖徳では、平素から教材研究と教材・教具の作成にはかなり力を注いでいるのです。こうして低学年の間に、意欲と集中力を育成しておく、高学年になるにつれて学力もめきめきと向上してきます。

よく聖徳学園小学校の卒業生は、中学や大学への進学実績が高いが、どのような受験指導をしているのかと言ったような質問を受けます。学校では、特別な受験指導をしているわけではありませんが、受験においても意欲と集中力、知能教育の成果は、結果的に大きなプラスになっていることは事実です。このことは、中学受験より大学受験と上級学校になればなるほど、効果を発揮しています。

## ●創造的知能の開発と育成

意欲と集中力の成果は、学力の向上だけではありません。創造的知能の開発と育成にも大きな成果を発揮してきます。



創造性の教育成果は、評価することはなかなか難しいのですが、一例として発明協会が毎年実施している、「東京都児童生徒発明くふう展」での成果を紹介します。聖徳では、毎年夏休み明けの9月に自由研究展を開催します。これにはほとんど全員の児童が、自分の興味・関心に基づき課題を見つけて、それについてまとめたり製作した作品を出品しています。児童によっては、小学校6年間一貫したテーマで研究を継続して取り組んでいる者もいます。この中から、校内審査を経て「東京都児童生徒発明くふう展」に該当する作品を15点（1校あたり15点までに限定）出品します。その結果、毎年10点くらいの作品が入賞し、これまで28回「学校賞」を受賞しました。そして東京都代表として全国コンクールに出品され、毎年2～3名の作品が入賞しています。

こうした成果を過分に評価していただき、今までに文部科学大臣から7回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞いたしました。このように、創造的知能の開発と育成では成果を挙げてきたように思っています。この創造性の開発と育成の条件を、これまでの実践結果から要約すると概ね次の通りです。

① 創造的態度を育成する

意欲・集中力・好奇心・根気・いろいろ工夫する態度等

② 個性を啓発して伸長する

③ 創造的知能を刺激し育成する

④ 直観力（直観的思考・ひらめき）を育成する

⑤ 個性と創造性を認め合える学校環境を整える

等です。本日の授業の様子から、少しでも汲み取っていただければと思います。

## ●個性と能力差に対応した複数指導（担任）制

子どもの個性や能力・発達段階は、一人ひとり異なることは言うまでもありません。これに対して一人ひとりにきめ細かな指導をしていくためには、まず少人数による学級編成が必要になってきます。少人数といっても、学校では子ども同士学び合い、刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく側面も大きいので、あまり1学級の人数を少なくすることには教育効果の上で感心しません。また、小集団でなければ、自分の力を発揮できないような子どもに育てても困るのです。

そこで聖徳では、昭和 54 年度から 1 学級の人数は 30 名にして、個人差が顕著な知能訓練や数学の授業において、2 人担任制を試みました。これは一つの教室に 2 人の担任が入って授業を進めるわけですから、2 人の担任の綿密な連携が前提になりますが、個別学習に重点をおく知能訓練や数学の授業では、かなり効果を発揮することが明確になってきました。

現在、複数指導（担任）制を実施しているのは、

幼稚園では、学級担任 カリキュラムあそび

小学校では、学級担任 知能訓練 ゲーム 工作 数学（1～3 年生）です。

また、学年が進むにつれて能力差は段々広がってきますので、数学と知能訓練では 3 年生から、そして国語と英語は 5 年生から能力（習熟度）別にクラス編成して授業を進めております。そのために、一人ひとりの子どもがゆとりを持って授業に取り組み、各自の能力の限界に挑戦することが可能になります。

本学園では複数指導（担任）制のねらいを、

① できるだけ多く（複数）の教師の眼で一人ひとりの子どもを指導する

② 一人ひとりの子どもの個性と能力差に対応したきめ細かな指導をする

この 2 点にあります。本日の授業を通して、複数指導（担任）制の利点を見ていただけたらと思います。

以上の通り、聖徳の教育の基本的な考え方と本日の公開授業（保育）の視点を簡単にまとめておきました。私たちの趣旨を少しでもご理解戴ければ幸いです。

また、本日の授業（保育）内容につきましては、「懇談会」において、意見交換していきたいと思っております。どうぞお気軽にご出席ください。このところ学校教育のあり方について関心を集めておりますが、21 世紀を生きる子どもたちの健全な成長を求めて、皆さん方と共に理想的な授業のあり方を追究していきたいと考えております。本日は、ご参会戴き誠にありがとうございました。

---

## 目 次

---

第48回 公開研究発表会に当たって .....	5
発表会要項 (時程表) .....	11
会場案内図 .....	14

### 幼稚園の指導案

#### ◇公開保育〈9:15～10:00〉

本日の公開保育について .....	17
3歳児 (ほし組)「クラス活動 (造形あそび)」 .....	18
3歳児 (はな組)「クラス活動 (知能あそび)」 .....	20
4歳児 (そら・もり組)「体育あそび」 .....	22
4歳児 (そら・もり組)「造形あそび」 .....	24
5歳児 (つき・やま組)「知能あそび」 .....	26
5歳児 (つき・やま組)「リトミックあそび」 .....	30

### 小学校の指導案

#### ◇公開授業〈9:20～10:20〉

1年生 (あさま組)「数学」 .....	35
1年生 (ほくと組)「ゲーム・工作」 .....	38
2年生 (のぞみ組)「数学」 .....	40
2年生 (はやて組)「知能訓練」 .....	42
3年生 (くろしお組)「理科」 .....	46
3年生 (はやぶさ組)「英語Ⅰ」 .....	48
3年生 (はやぶさ組)「英語Ⅱ」 .....	50
4年生 (はまかぜ・わかしお組)「知能訓練A」 .....	52
4年生 (はまかぜ・わかしお組)「知能訓練B」 .....	56
5年生 (あずさ組)「地理」 .....	60
5年生 (やくも組)「理科」 .....	62
6年生 (つばさ・みずほ組)「国語A」 .....	64
6年生 (つばさ・みずほ組)「国語B」 .....	68
6年生 (つばさ・みずほ組)「国語C」 .....	72

## 全体会 〈10：30～11：40〉

あいさつ .....	75
園児・児童発表 年長児 歌 唱 4年生 合 唱	
研究発表「聖徳学園における児童会活動」	

## 平成28年度の研究活動計画

研究部の活動計画 .....	79
知能教育研究部の活動計画 .....	80
国語科研究部の活動計画 .....	81
数学科研究部の活動計画 .....	82
英語科研究部の活動計画 .....	83
理科研究部の活動計画 .....	84
地理科研究部の活動計画 .....	85
歴史科研究部の活動計画 .....	86
体育科研究部の活動計画 .....	87
音楽科研究部の活動計画 .....	88
美術科研究部の活動計画 .....	89
家庭科研究部の活動計画 .....	90

研究発表会のあゆみ .....	91
-----------------	----

# 発 表 会 要 項

## 1. 主 題：英才教室の追究

創造的知能の開発と育成 (21)

個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (15)

## 2. 時 程

	9:00	9:15	10:00	10:30	11:40	11:45	12:30
▼							
▲							
9:20	10:20	10:30	11:40	11:45	12:30		
9:00	9:15	10:00	10:30	11:40	11:45	12:30	
1F	1F	1F	1F	1F	1F	1F	1F
	公開保育 (各保育室)	公開授業 (各教室)	休 憩	全体会 (小学校4F講堂) 1. 園長・校長挨拶 2. 園児・児童発表 3. 研究発表	休 憩	懇談会 ・聖徳の教育 (小学校音楽室) ・小学校の教育 (4F講堂) ・幼稚園の教育 (3F教室)	解 散

## 3. 内 容

### (1) 授業公開及び保育公開

◇ 公開保育 (幼稚園 9:15～10:00) ※4・5歳児は、興味・関心に応じた選択制になっています。

年齢	組	領 域	あそび設定の視点	あそびの題目及び内容	会場	頁
3歳	ほし	クラス活動 (造形あそび)	自由あそびを広げていく製作活動	クッキーやさんごっこ ～粘土をつかって～	ほし	18
	はな	クラス活動 (知能あそび)	考える楽しさを味わい育てるための 複数指導	同色のものがし ～色・いろ思いつこう～	はな	20
4歳	そら もり	体育あそび	一人ひとりの発達段階に応じた二人 指導	忍者修行に挑戦! ～跳び箱を使って～	ホール	22
		造形あそび	想像力を育む制作活動	あおむしくんを作ろう ～絵本の世界より～	そら	24
5歳	つき やま	知能あそび	一人ひとりの図形的な能力を引き 出す指導	漢字パズル ～街の漢字をつくろう～	やま	26
		リトミック あそび	イメージ力を豊かにする表現活動	おとの様からの謎解きで ござる!	つき	30

◇ 公開授業 (小学校 9:20～10:20)

学年	組	教 科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
1年	あさま	数 学	ゲームを通して、一人ひとりの 能力を発揮させる学習指導	加減を用いた3項計算を使い ゲームを行い思考の柔軟性を 養います。	あさま	35
	ほくと	ゲーム・工作	身のまわりのものを用い、創造 的知能の育成を目指した指導	オリジナルけん玉づくり	ほくと	38
2年	のぞみ	数 学	「何で？」を説明する力を育 む学習指導	「マジックの謎」に迫り、「? (タネ)」をひもとく追求姿勢 を育成します。	のぞみ	40
	はやて	知能訓練	パズルを通して推理力の育成 を目指した指導	『キューブモザイクパズル』 ～平面から立体の世界を想像しよう～	はやて	42

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
3年	くろしお	理科	体のつくりを比較して、進化の過程を類推する指導	身近な生き物の体のつくりの変化を捉え、生物の進化の様子を思い描く。	多目的情報室	46
	はやぶさ	英語Ⅰ	一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習	動物の名前や体の特徴などを英語で楽しく学ぶ。	くろしお	48
		英語Ⅱ			はやぶさ	50
4年	はまかぜ わかしお	知能訓練A	数的推理力を通して限界に挑戦することを目指した指導	『立体数パズル』 ～サイコロの構成を考えよう～	わかしお	52
		知能訓練B	概念で関係を拡散思考することで創造的知能の開発と育成を目指した指導	「概念ドミノゲーム」 チームで言葉リレーをすることで、思考の柔軟性を養います。	はまかぜ	56
5年	あずさ	地理	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導	新旧の地形図から、工業の発展及び、街と人々の生活の変化について考察します。	あずさ	60
	やくも	理科	立案した実験の考察から科学的思考力を育てる学習指導	物体によって水に沈む速度の違いが生じる原因を探る。	理科実験室	62
6年	つばさ みずほ	国語A	漢詩の対句を教材に、創造的知能を育成	対句の仕組みからイメージづくりを行い、漢詩づくりに挑戦します。	つばさ	64
		国語B	文学的文章を教材に創造的知能の開発と育成を目指した学習指導	「野原の声」イマジネーションの共鳴ということを考える。	みずほ	68
		国語C	「雨ニモマケズ」を教材に、創造的知能の育成を目指した学習指導	素読によって慣れ親しんだ宮澤賢治の「雨ニモマケズ」を輪講によって彼の思いに迫ります。	学習室	72

(2) 全体会（会場：講堂 10：30～11：40）

\* あいさつ

園長・校長：和田 知之

\* 園児発表 5歳児 歌唱  
4年生 合唱

\* 研究発表 「聖徳学園における児童会活動」

—豊かな人間性と社会性を保障する自主的・自治的活動の展開—

児童会担当：板橋 裕之



(3) 懇談会（会場：講堂・3階教室 11：45～12：30）

\* 懇談会は、下記の三つの分科会に分かれて行います。

分科会名	主 題		主な出席教員
聖徳学園の教育	聖 徳 の 教 育 の 特 色 (聖徳学園小学校の概要及び入学についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)		園長・校長 小学校担当者
幼稚園教育	本日の保育・ 授業をもとに	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 個性と能力差に対応した複数指導（担任）制 (保育内容及び入園についてお知りになりたい方は、 こちらの懇談会にご出席ください。)	松浦教頭 幼稚園担当者
小学校教育		創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 個性と能力差に対応した複数指導（担任）制 (教科教育についてお知りになりたい方は、こちら の懇談会にご出席ください。)	齊藤教頭 知能訓練担当者 小学校担当者

\* 総合案内（9：00～10：30）

6号館2F（1年ほくと組前廊下）に、教職員・案内役が待機しております。教室の場所、授業案内等、ご質問がございましたら、お気軽にお声がけください。

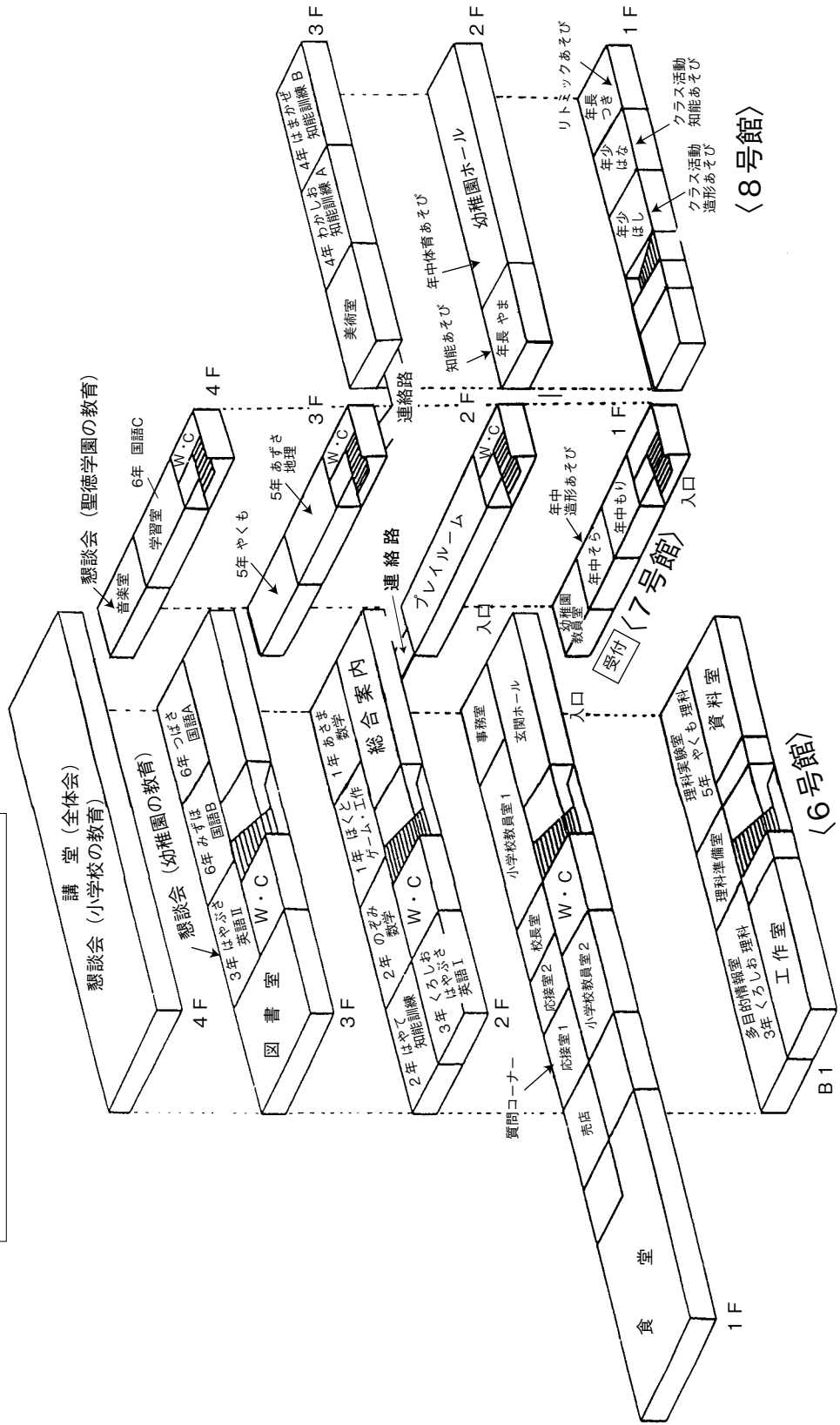
また、本日の内容及び本学園の教育についてのご意見やご質問がありましたら、懇談会へ是非ご参加ください。そちらでお受けいたしております。

\* 参考文献

- 「聖徳の教育」 聖徳幼稚園・聖徳学園小学校刊  
「数学教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）  
「国語教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）  
「地理教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）

# 聖徳学園 幼稚園 案内図

6号館と7号館は2階で、7号館と8号館は3階で連絡しています



# 幼稚園の部



## 本日の公開保育について

本園では、「自由保育」を実施しておりますが、その主な活動は、

自由あそび

カリキュラムあそび

の2つの方法で進めています。

カリキュラムあそびは、

◇知能あそび

◇体育あそび

◇リトミックあそび

◇造形あそびの4つのあそびがあります。

4歳・5歳児は、この中の4つのあそびの中から2つのあそびを設定しました。

園児は2つのあそびの内容を担当の先生より聞いて、自分の好きなあそびの方を主体的に選択して遊びます。

3歳児は、年齢や実態を考慮して、クラス活動の中でカリキュラム遊びを取り入れて、進めています。

本日の活動は下記の通りです。

		9時15分～10時00分	内 容
3歳児	ほし・はな	ほし	・クラス活動 (造形あそび) クッキーやさんごっこ ～粘土をつかって～
		はな	・クラス活動 (知能あそび) 同色のものさがし ～色・いろ思いつこう～
4歳児	そら・もり	・体育あそび	忍者修行に挑戦！ ～跳び箱を使って～
		・造形あそび (選択性)	あおむしくんを作ろう ～絵本の世界より～
5歳児	つき・やま	・知能あそび	漢字パズル ～街の漢字を作ろう～
		・リトミックあそび (選択性)	おとの様からの謎解きでござる！

選択の時間 9時00分から9時15分 子どもたちが、内容説明を聞いて選択します。

選択の場所 4歳児 そら組にて行います。

5歳児 幼稚園ホールにて行います。

## クラス活動 (造形あそび) 指導案

9 : 15 ~ 10 : 00 於 : ほし組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと4つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に造形的な遊びを取り入れながら進めていく。

指導者 永坂圭子  
神山祐希

1. 年齢 : 3歳児 (ほし組)
2. あそび設定の視点 : 自由あそびを広げていく製作活動
3. 主題 : クッキーやさんごっこ ~粘土をつかって~
4. 主題について

いろいろな形に自由に変えられる粘土は、子どもたちの大好きな素材だ。日ごろから、自由あそびの中で油粘土を使いお菓子を作ったり、恐竜や動物を作ったりして遊んでいる。今回は、絵の具を混ぜた紙粘土を使用し、また違った感触や、色合いを楽しみながらクッキー作りをしたい。さらに、そのクッキーを元におみせやさんごっこができるように、チケットや包装するものなどを準備していきたいと思う。

### 5. 園児の様子

入園して間もない子どもたち。少しずつ園生活にも慣れてきた。自由あそびでは好きなあそびを見つけ、安定して遊べるようになってきた。4つのカリキュラムあそびにも、興味を持って取り組む姿が見られるようになってきている。造形あそびでは、絵の具、粘土、紙などの感触を楽しむ中から作品になる喜びを感じ、経験を増やしているところである。

### 6. 本時のねらい

粘土の感触を楽しみながら、クッキー作りを楽しむ。

### 7. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	〈2人の指導者の動き〉 T1・T2 : 活動に入る挨拶をする。
2. 本時の内容の説明を聞く。	T1 : 本時の活動内容を説明する。 T2 : 子どもたちの聞く様子を観察し、個別に声をかけながら援助する。
3. 粘土を伸ばす	T1・T2 : しっかり伸ばせるように援助していく



<p>4. 形をつくる</p>	<p>T1・T2：いろいろな型試を使ったり、自分の好きな形のクッキーを作っていけるように声をかけていく。</p>
<p>5. トッピングをする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• アイロンビーズ</li> <li>• モール</li> </ul>	<p>T1・T2：4までの作業を続けている子どもにも配慮していく。</p>
<p>6. 乾燥させる</p>	<p>T1・T2：おみやげさんごっこで使うみんなのものであることを理解できるようにしていく。</p>
<p>7. おみやげさんの開店準備をする</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• お皿を用意する。</li> <li>• チケットを用意する</li> <li>• 看板を作る                    など</li> </ul>	<p>T1・T2：ごっこあそびに期待が持てるようにそれぞれのアイデアを出し合えるようにする。T1、T2で、分担して子どもたちのやりたい準備を出来るようにしていく。</p>

## 8. 評価

それぞれの子どもたちが意欲的に取り組み、それぞれの表現を楽しむことができたかを指導者間で確認し、評価していく

## クラス活動 (知能あそび) 指導案

9 : 15 ~ 10 : 00 於 : はな組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと4つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に知能的なあそびを取り入れながら進めていく。

指導者 松 浦 雅 美  
北 村 満利恵  
飯 濱 久美子

1. 年 齢 : 3 歳児 (はな組)
2. あそび設定の視点 : 考える楽しさを味わい、育てるための複数指導
3. 教材名 : 同色のものさがし ~色・いろ思いつこう~
4. 本時刺激される知能因子 : 記号で単位を拡散思考する (DSU)
5. 本時のねらい : 提示された色と同じ色をもつものを数多く思いつくことにより、記号で単位を拡散思考する能力を育てる。

### 6. 教材について

知能あそびでは「楽しく遊びながら知的好奇心を育て、考える力 (幅広い思考力) を育てていく」というねらいを基に活動を進めている。特に3歳という低年齢児が、知的な遊びに興味を持って楽しく向かえる様、様々な手作り教材を取り入れて日々の活動を行っている。

知能あそびを行った翌日に保育室に行くと、おもちゃの整理整頓 (CMC 概念的な共通点を見つけて仲間分けをするねらいの知能因子) が上手になっていたり、折り紙 (EFS 折り方見本と手元の折り紙とを比較判断しながら作品を完成させていくねらいの知能因子) に夢中になっている姿が見られると、机上だけの学びではなく、日々の生活全般を含め、幅広く「刺激」がされているところの大きさを実感することが出来、嬉しくなる。

本時は、こういった“考える力”を育てるきっかけ作りの一つとして、提示された色と同じ色のものを数多く思いつく、同色のものさがしを行う。

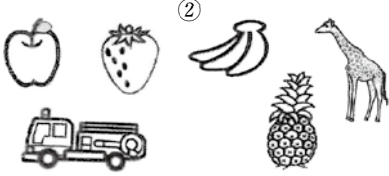

私たちの身の回りには、いろいろな色がある。『りんごは何色? ⇒赤!』『バナナは? ⇒黄!』『牛乳は? ⇒白!』などなど。このように事物の名称を言えば、それらの色を次々に言うことが出来る。ここで少し視点を変えて『赤いものは?』『黄色いものは?』『白いものは?』という発問方法にするとどうであろう。自分が知っている事物の引き出しから、指定の色のものを引っ張り出して来なくてはならない為、難易度がグッとアップする。この点が認知力とは違う拡散思考力の奥深さである。クラス全員で発表をする時間、個別でじっくり考える時間をバランス良く取り、子どもたちにとって刺激の多い時間となる様、心がけながらあそびを展開していこうと思う。

### 7. 園児の様子

入園して約2ヶ月。甘えん坊さんや恥ずかしがりやさんが多いが、一人ひとりが好きな遊びを見

つけながら園生活を楽しんでいる。少しずつお友達にも関心を示す様になり、お弁当などの簡単なグループ活動も出来るようになってきた。自由あそびでは、車や電車あそび、スカートを履いてお姫様ごっこやおままごと、段ボール製自動販売機でのジュース屋さんごっこなどに夢中になっている。知能あそびに於いても、好奇心旺盛な瞳を輝かせながら楽しむ姿が印象的である。反面、まだ年齢的なこともあって、長い時間の集中が難しかったり、いつもとは違う状況に戸惑ったりすることも予想されるので、子ども達の様子を複数指導の目できちんと受け止めていきたい。

## 8. 本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
<p>1. あいさつ・出席確認</p> <p>2. 展開</p> <p>(1) 半円になって着席し、指定された色と同じ色をもつものを数多く思いつき発表する。</p> <p>(問題例)</p> <p>①赤色のものは、なあに？</p> <p>②黄色いものは、なあに？</p> <p>(予想される発言)</p> <p>①  ② </p> <p>(2) テーブルに着席して、指定された色と同じ色をもつものを数多く思いつき、紙で作ってお弁当箱に詰めていく。 ※扱う紙は、折り紙・お花紙など。</p> <p>3. 片づけをする。</p> <p>4. おわりのあいさつをする。</p>	<p>○出席確認をしながら、本日の健康状態等も把握する。</p> <p>T1：色をイメージし易い様に色カードを提示しながら発問する。 ※例えば「いちごは、赤と緑！」というような解答が出た場合は、大いに認め、その後に活かしていける様、心掛ける。</p> <p>T2：子どもの発言をホワイトボードに記録し、意欲付けにつなげる。</p> <p>T3：それぞれ、子どもたちの間に入り、聞きもらしている子どもがいないか、またイメージが出来ているかを把握し、適宜助言をする。</p> <p>T1：紙の扱い方（丸める・くしゃくしゃにする・裂く等）について説明をする。 素材の感触を味わいながら手先を存分に使うことを念頭に置いて指導する。</p> <p>T1・T2・T3：“お弁当”という設定は、あくまでもイメージをし易くする一つのきっかけであるので、お弁当の中身ということに拘らず、自由な発想（例えば赤い中央線を作ったとしても）を認めていく。</p> <p>○すみやかに片づけられる様、指示する。</p> <p>○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。</p>

## 9. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

## 体育あそび指導案

9 : 15 ~ 10 : 00 於 : 幼稚園ホール

指導者 佐藤 憲夫  
園山 恵理子

1. 年齢 : 4 歳児 (そら・もり組)
2. あそび設定の視点 : 一人ひとりの発達段階に応じた二人指導
3. 主題 : 忍者修行に挑戦! ~ 飛び箱を使って ~
4. 主題について

子どもたちは、童話や絵本が大好きである。寝るときに童話などを読んでもらって想像力をかきたて、夢をふくらませながら、心地よい眠りについたことを思い出す。物語を体育と結びつけば、子どもたちにとって、これ以上楽しい運動はない。

今回は「忍者」に変身して、様々な修行の場を設定、子どもたちがイメージを膨らませながら楽しく身体を動かし、多様な動きを経験させていきたい。

年中なので、飛び箱に慣れるところから始め、簡単な動きの「よじ登る」、「とび降りる」から「手をジャンプしながら何回叩けるか」や「180 度反転ジャンプして着地」、「ジャンプしながら、タンバリンを叩く」そして、「一番高く手を伸ばしてジャンプしながら、タンバリンを叩く」等の色々な動きにチャレンジさせていく。

飛び箱を山に置き換えて設定することにより、子どもたちに豊かな創造性を持たせ、興味をわかせていきたい。いろいろな動きを行うことで冒険心を膨らませ、総合的な調整力を養い、高度な技に発展させていく基礎を身につけていければと思う。

最後に「島渡りゲーム」と題して、片足ケンケンをしながら、島から島へと移動するゲームをする中で、跳ぶ感覚や、バランス感覚を身につけていきたい。

### 5. 園児の様子

日頃から互いに声をかけあって「子増やし鬼」や「氷鬼」、「警察ごっこ」等をして、園庭を自由自在に走り回ったり、雲梯や鉄棒等、身体を使って遊びことが大好きな子どもたち。また週 2 回の体育あそびにおいても、指導者 T1 が保育室に入ってくると「わあ〜い!!」といった歓声が起こり、その時点で、子どもたちのわくわく感とか「早く体育あそびやりたい」という内なる声が聞こえてくる。今回の活動のテーマは、そんな子どもたちの期待に応えられる内容にした。

### 6. 本時のねらい

- 飛び箱を使った遊びを経験させる。
- 正確な動きを意識させながら楽しく行えるようにする。
- ルールを守りながら、ゲームを楽しむ。

## 7. 本時の指導過程

\*最初に2つ（造形あそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9：00～9：15 場所：そら組保育室

園児の活動	指導上の留意点
1. 整列と出席の確認 ・クラスごとに整列する。 2. 準備体操（まねっこ体操） ・体をあたため、これからの活動が十分に行えるように準備体操をする。 3. あいさつ 4. 本時の内容と説明 5. 跳び箱使用（台上での活動） 1) のぼる・とび降り・着地 しっかりと両足でマットに着地する。 2) ジャンプしながら手を何回叩けるか？ 3) ジャンプしながら180度反転して着地。 4) ジャンプしながら、タンバリンを叩く。 5) 手を伸ばした状態にタンバリンを置いて叩く。 ※どちらもマットでの着地に意識させる。 6. 島渡りゲーム（マット8枚使用） ・ゲームに必要な動きやルール等を確認する。 7. 整理体操 8. 整列・あいさつ・まとめ	〈二人の指導者 T1・T2 の動き〉 ・教師の動きを見ながら、元気よく体操を行えるようにする。 ～指導者の動き～ T1：子どもたちの前で見本を示す。 T2：巡回しながら一人一人の様子を見る。 ・整列させて元気よくあいさつができるようにする。 ・本時の予定と注意事項を説明する。 ・跳び箱に慣れさせる。 ・教師が補助につき、怪我のないように注意し、又、のびのびとジャンプできるように声がけをする。 ～指導者の動き～ T1・T2：うまくできない子どもには補助しながら励ましの言葉をかけていく。 ～指導者の動き～ T1：子どもたちの前で見本を示しながら、リードしていく。 T2：子どもたちを補助しつつ、一人ひとりの活動を認めながら、励ましの言葉をかけていく。 ・本時のまとめと次回の活動について話し、期待を持たせるようにする。

## 8. 評価

・色々な動きに興味を持って、楽しく取り組めたか。

主に、一人ひとりの取り組み姿勢や反応などを複数の指導者で確認しながら評価していく。

## 造形あそび指導案

9 : 15 ~ 10 : 00 於 : そら組保育室

指導者 荒井明子  
水嶋知佳

1. 年齢 : 4 歳児 (そら組・もり組)
2. あそび設定の視点 : 想像力を育む制作活動
3. 主題 : あおむしくんを作ろう ~絵本の世界より~
4. 主題について

絵本の中のあおむしくんは、おいしそうな食べ物を食べている。りんご、なし、すもも、いちご、オレンジ……体をくねらせ食べ物の中に入れてぱくぱくと。どうやって体をくねくねと動かしているのかな? くねくね出来たら何をしてみようかな? と想像してみる。自分が想像したあおむしくんを、子どもたちが形にしていけるような活動になればこの教材を考えてみた。工作することが大好きな子どもたちなので、のびのびと活動ができればと思う。

### 5. 園児の様子

自由あそびの時間に、空き箱を使って工作を楽しむ姿が見られる。箱を組み合わせてテープで止めるだけでなく、色紙やペンを使って工夫したり、工作したものを使って遊びを広げたりと日常の中で造形的な活動を好む子どもも多い。使う素材を見て、触って、何ができそうかな? と考える姿はとても生き生きとしている。

今回は、“絵本の世界” から、子どもたちが様々な想像を膨らませて、造形あそびを行なっていければと思う。

### 6. 本時のねらい

- 絵本の世界から、それぞれの想像を引き出していく。
- はさみ、クレヨンで楽しく工作できるようにする。

### 7. 本時の指導過程

\*最初に2つ(造形あそび・体育あそび)の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間 : 9 : 00 ~ 9 : 15 場所 : そら組保育室

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。 2. 本時の内容の説明を聞く。	T1 : これからの活動に期待を持てるように説明していく。



3. 絵本を読む。	T1 : 絵本を読み聞かせる。 T2 : 人数を確認して、テーブルを出す。(1 テーブルにつき4人まで)
4. テーブルに座り、材料をもらう。	T1・T2 : はさみや造形シートを配る。
5. スチレンボードを切って、体の部分を作る。	T1 : 材料が足りない場合を考え、準備しておく。 T2 : うまくはさみが使えない子どもには援助する。
6. クレヨンで色付けをする。 (顔の部分は『目』も描く)	T2 : スチレンボードの切れ端がテーブルに残っていないように声をかける。
7. 教員と一緒に体の部分を組み合わせ、割ピンで止める。	T1 : 色付け出来た子どもから順に、割ピンで止めていく。
8. 色紙で足と触角を作り、セロテープで体に貼る。	T1 : 子どもたちの進み具合を見て、先に来た子どもには色紙を配り、工程を進めていく。 T2 : 引き続き割ピンで止めていく。
9. 鑑賞する。	T1・T2 : 完成した作品を飾る。
10. 挨拶をする。	T1・T2 : みんなで片付けをするように声をかける。 T1 : 作品を鑑賞することにより、友だちの発想も認めていけるようにする。 T1 : 本時のまとめをして次回に期待を持てるようにする。

## 8. 評価

- 子どもたちが絵本を読み、想像を膨らますことができたか。
- はさみやクレヨンで工作を楽しむことができたか。
- \*これらの点を指導者間で確認し、評価していく。

## 知能あそび指導案

9 : 15 ~ 10 : 00 於 : やま組保育室

指導者 大 嶋 比 查 子  
久 保 千 春

1. 年 齢 : 5 歳児 (つき組・やま組)
2. あそび設定の視点 : 一人ひとりの図形的な能力を引き出す指導
3. 教材名 : 漢字パズル ~街の漢字を作ろう~
4. 本時刺激される知能因子 : 図形で体系を認知する (CFS)
5. 本時のねらい

分割された漢字のパズルピースを、その形に着目して見本 (漢字) の形と照合し、見本通りに完成させていくことにより、図形で体系を認知する能力を育てる。

### 6. 教材について

子どもたちの知的好奇心を刺激しながら、さまざまな思考力を養う教材を考える時、興味を引く素材や内容が、意外に身近にあったりすることがある。知能あそびでは、これまでも図形的な教材の中に基本図形だけでなく、恐竜や魚、万国旗や家紋などを素材に作成している。その取り組みから新しい興味と知識につながることもある。

『漢字』は、名前はもちろん駅名や看板など街のあちらこちらで見かける。子どもたちにとっても魅力のある素材ではないだろうか。今回の作成にあたって、駅中から学園までの看板など改めて見てみると、沢山の『漢字』で溢れていた。

本時はその中からいくつか取り上げて、『漢字』を分割しパズルとして与える。パズル形式は日頃楽しみながら取り組んでいる教材である。見本の『漢字』を見ながら、全体の形と図形の線を正しく捉え、パズルピースを合わせて復元していくのである。今回は街の『漢字』という素材から二文字熟語、三文字熟語を3~4分割にして与える。『漢字』を目にした時「難しい?」と思う子どもがいるであろう。そこで始めにグループで協力して一緒に考える活動を通して「できそうだ!」という自信をつけさせて、個々で進めるパズルに取り組ませたい。熟語パズルが中心になるが、パズルが得意な子どもたちに難易度を上げた、5つの似た『漢字』を集めたパズルも用意した。どちらのパズルも袋に4~5つのピースが一緒に入っているので1つのピースがどの漢字の一部分かを見ながら、全体の形を照合していくのである。パズルを完成させると、台紙が透明になって持ち上げると、裏に写真や読み方の文字が見え、完成の確認が出来ると共に更に興味が持てるようになっている。子どもたちが次々と楽しく挑戦出来るように、また躓いたときに自分の力で完成出来るように指導を心掛けていきたい。そして『漢字』のパズルを取り組む中で、図形での思考力を養うだけでなく、『漢字』に対する興味が深まることを期待している。

## 7. 園児のようす

年長になりお当番活動が始まり、皆張り切っている様子が伝わってくる。クラスの集団の中でも一人ひとりが自分らしさを出せるようになってきた。

子どもたちは週2回、カリキュラムあそびの時間に2つの活動の中から、知能あそびを選択する機会がある。その日のあそびの内容を聞き、「やってみたい!」「面白そうだ!」「得意なものだ!」とそれぞれの思いで集まってくる。考えることが大好きで毎回のよう選んでくる子どももいる。

自分で選んでくることもあって、多くの子は夢中になって、時間いっぱい楽しみながら取り組んでいる。「楽しかった。もっとやりたい!」という声もたくさんあがる。子どもたちが目を輝かせて、取り組んでいることが教材作成の一番の力になっている。

4月に行った「数の大きさ比べ」のゲームではとても盛り上がり、何回戦も取り組んでいた。

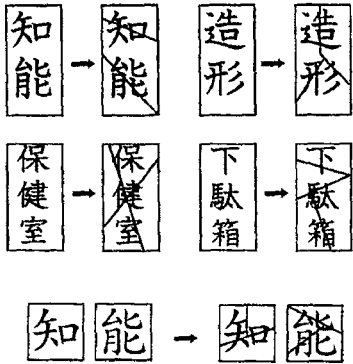
また「スリーヒントクイズ」では、沢山の子どもたちが集まって、考えることを楽しんでいた。

『漢字』に興味を持っている子どもが多いので、今回のパズルも楽しめるであろう。グループ活動の作業から、協力して一緒に考える楽しさや、個々でじっくり考え完成させる達成感を味わって欲しいと思う。集まった子どもたちが充実した時間を過ごせるように指導していきたい。

## 8. 本時の指導過程

\*最初に2つ（知能あそび・リトミックあそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

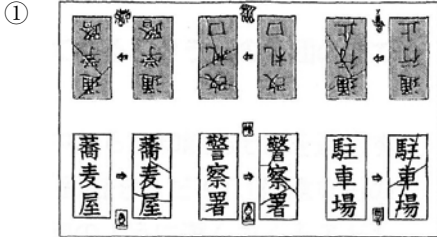
時間：9：00～9：15 場所：幼稚園ホール

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点等
<p>1. 始まりのあいさつをし、出席確認をする。</p> <p>2. 全員で集まってすわり、説明を聞いてやり方を理解する。</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>出席確認して、本日の健康状態等を把握する。</li> </ul> <p>T1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>説明用の見本とパズルのピースを提示して、どのように組み合わせたらパズルが完成できるか考えさせる。</li> <li>特に漢字は縦、横、斜めの線がつながっているか、全体の形が見本と同じかを確認させる。</li> </ul> <p>T2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちがやり方を理解しているか、一人ひとりの反応と様子を見る。</li> </ul>

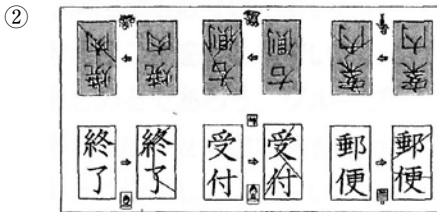
3. 椅子を出してそれぞれの席につく。

- グループでパズルに取り組む。

『漢字パズル 1』



- グループで協力しながら、パズルを完成させていく。出来上がったら確認してもらい 2 題目に取り組む。



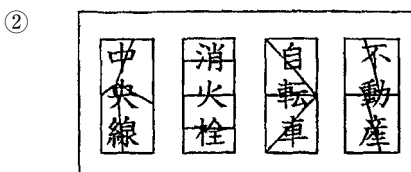
- 終えたグループから、ボードとパズルピースを片付ける。

4. 個別のパズルに取り組む。

『漢字パズル 2』: 5 題

(4 つの熟語の 3 ~ 4 分割のピースが 1 袋に入っている)

- パズルピースと見本の進度表、ピースをはめ込む台紙を持ってきて個別にパズルに取り組む。



T 2

- 4 人のグループになって、それぞれの席につくように指示する。

T 1

- 子どもたちの移動に気を配り準備を整え、パズルピースをはめ込むボードとピースを配る。

T 1・T 2

- 机間巡視して、やり方を理解しているか、適宜指導、助言していく。またグループで協力して取り組めるよう留意する。
- ①の問題を終えたグループには次の問題を配る。

T 1・T 2

- パズルを終えたグループから片付けの指示をする。

T 1・T 2

- パズルピースと見本の進度表、ピースをはめ込む台紙を持ってくることを指示する。

T 1・T 2

- 机間巡視して作業や動きがスムーズに行われているか適宜指導、助言していく。

- 全体の形 (漢字)、線のつながり方、パズルピースの切り口など、よく見て組み合わせているか確認していく。

- 見本の進度表を見ながら、パズルを完成させていく。
- パズルが完成したら台紙を持ち上げ、裏面にある写真が完成しているかを見る。
- 確認してもらい、見本にシールを貼って、次のパズルと交換して取り組む。

## 『漢字パズル 3』：全5題

(5つの熟語の3分割のピースが1袋に入っている)

- パズルピースと見本の進度表、ピースをはめ込む台紙を持ってきて個別にパズルを取り組む。



- 見本の進度表を見ながら、パズルを完成させていく。
- パズルが完成したら台紙を持ち上げ、裏面にあるひらがなの読み方が完成しているかを見る。
- 確認してもらい、見本にシールを貼って、次のパズルと交換して取り組む。

## 5. 片付け

- パズルピースと台紙を所定の場所に片付ける。
- 終わりのあいさつをする。

T1・T2

- 熟語パズルを終えた子どもから、パズルピースと見本の進度表、ピースをはめ込む台紙を持ってくることを指示する。

T1・T2

- 机間巡視して作業や動きがスムーズに行われているか適宜指導、助言していく。

- 全体の形(漢字)、線のつながり方、パズルピースの切り口など、よく見て組み合わせているか確認していく。

T1・T2

- 片付けの手順を指示する。
- 片付けが速やかに行えるように対応する。
- 本時のまとめをし、終わりのあいさつをする。

## 9. 評価

活動後、本時を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みや反応、理解度など指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかをまとめて今後の実践に活かしていく。

## リトミックあそび指導案

9 : 15 ~ 10 : 00 於 : つき組保育室

指導者 高 井 正 恵  
磯 沼 美 紀

1. 年 齢 : 5 歳児 (つき組・やま組)
2. あそび設定の視点 : イメージ力を豊かにする表現活動
3. 主 題 : おとの様からの謎解きでござる !
4. 主題について

子どもたち一人ひとりが持っているイメージの世界は、限りなく広がっていて自由自在に変化していくことができる。今回はカブトをかぶり武士になりきって遊んでいる子どもたちの姿をヒントに、おとの様から挑戦状が届いたという設定にした。そして年長になってから体験した拍子、休符の理解を深めるために、“謎解き”形式にもなっている。

音の聴き分けによる動きの表現を楽しみながら、友だちと力を合わせて問題を解いていく中で、さらに音楽の面白さ、喜びを感じてもらいたい。

### 5. 園児の様子

年長になり、日々の取り組みにおいて、ますます意欲面が向上してきている。お当番活動を積極的に行なったり、友だちと話し合いながら好きなあそびを繰り返し広げている。また、4つのカリキュラム活動においても時間いっぱいまで楽しむ様子が見られる。リトミックあそびでは、イメージ表現や音の聴き分けの活動を通して、音楽の楽しさを感じているところである。

### 6. 本時のねらい

イメージの世界で自分の表現が伸びのびできるよう、また体験を通して拍子や休符などが感覚的に捉えられるよう、豊かな感性を伸ばしていきたい。

### 7. 本時の指導過程

\*最初に2つ(リトミックあそび・知能あそび)の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間 : 9 : 00 ~ 9 : 15 場所 : 幼稚園ホール

教材の内容及び活動	指導上の留意点
~準備 : 裸足・円になる~  1. リトミックあそびのうた、あいさつ	○空間を広く使えるよう、環境を整える。 T1 : 全体を通してピアノをベースに活動を進めていく。 T2 : 子どもたちと一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。  ○これから活動を始める意識を持たせるようにする。



## 2. 「おとの様からの謎解きでござる！」

昔、いろんなことに挑戦するのが好きなおとの様がありました。そんなおとの様は、聖徳幼稚園の子どもたちが物知りなことを知り、本当なのか試してみたくなりました。さて、おとの様からの謎を、子どもたちは解くことができるのでしょうか？

◆手紙の内容を知る

◆謎のうたを歌う

**出発**

【スキップの聴き分け～♪♪／♪♪～】

【GO & STOP】

◆2種類の馬を乗りこなす

- 暴れ馬 ～♪♪～：手綱をひく
- おとなしい馬～♪♪～：友だちと一緒に

**お城の門**

◆家来の模倣～家来になるためには？～

【即時反応】

- ちょんまげ：身だしなみを整える
- あいさつ：「ははーっ」頭を下げる
- 剣の腕前：手裏剣をはねかえす

**謎解き第一の部屋**

【拍子】

- ◆うたが何拍子か当てる
- 友だちと手合わせをして確認する

**謎解き第二の部屋**

【長調、短調の模唱】～どんな感じ？～

- ◆円になり、音を聴いて気持ちを表わす  
(うれしいな←かなしいな…)
- 音を立てずに進み…宴会の広間をぬける～

**謎解き第三の部屋**

【休符】

- ◆うたの中にお休みがいくつあるか当てる
- 手たたきをして確認をする

T2：お話をじっくり聞けるような雰囲気作りをする。

T1：子どもたちの気持ちをひきつけるように手紙を読む。

T1：リズムの違いをはっきり表わす。

T2：友だちを見つけられない子どもには適宜援助する。

T1：子どもたちからの意見を引き出す。

T1：即時反応の合図を子どもたちにわかりやすいように伝える。

子どもの動きを見て合図を出すタイミングを工夫する。

T2：反応の速い子どもを認めていく。

T1：拍子に気付けるように弾く。

T2：音楽を感じながら歌うよう声をかける。

T2：友だちを見つけられない子どもには適宜援助する。

T2：全員の気持ちを合わせられるよう集中して音を聴くよう声をかける。

T1・T2：子どもたちの意見を取り入れながら進めていく。

T1：休符を見つけやすいように弾く。

T2：音楽を感じながら歌うよう声をかける。

音の階段

- ◆ 謎解きで集めたものが何か、考える
- 最後の門を開けたら…

3. 終わりのあいさつ

○ みんなで力を合わせて考える。

T1・T2：子どもたちからの意見を引き出す。

○ 本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。

## 8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

# 小学校の部



## 数学科学習指導案

9：20～10：20 於：あさま

指導者 細 沼 克 吉  
桂 田 晶

### 1. クラス名：あさま組（1年生）

児童 31名 聖徳式（個人）平均 IQ 139.8

### 2. 授業設定の視点：一人一人の能力に応じて、ゲームに取り組んでいく中で、柔軟な思考を育てていく

### 3. 題 目：等号・不等号を利用したゲーム

### 4. 題目について

本校では一年生の授業から90分の授業を取り入れている。これは子どもたちに教え込むのではなく、子どもたちがそれぞれのペースでじっくりと考えていく姿勢を身につけていくことをねらいとしたものである。とりわけ数学は教科の特異性もあり、子どもたちが各自のペースで時間をかけて取り組んでいくことが大切なことと考える。

一年生が90分の授業を集中して取り組んでいくことは一見困難なように見られがちである。特に1学期は小学校生活に慣れることに時間がかかり、長時間の授業に集中して取り組んでいくことは初めのうちは難しい面も見られる。しかし様々な授業の工夫をしていくことで、子どもたちは次第に授業に慣れ、集中して取り組むことができるようになってくる。また英才児は難問をあきらめずに考えていくことを好む傾向が強く、十分な時間を与えて考えさせていくことが子どもたちのやる気や粘り強さを育てていくことにつながっていくと考えている。今年をあさま組の子どもたちも4月から少しずつ授業に慣れ、意欲的に取り組むことができるようになってきている。

一年生の学習では様々なゲームを取り入れている。これは「 $2 + 3 = 5$ 」の機械的な計算を行っていくことも必要ではあるが、それよりも、たとえば0から10までのカードを使って答えが5になる2組のカードをトランプ形式で行っていったほうが、子どもたちは自分の持っている様々なカードの中から「 $1 + 4$ 」「 $0 + 5$ 」「 $3 + 2$ 」など足し算を考え、ゲームを通して何通りもの計算を頭の中で行うことになる。さらにそのようなゲームを通して計算に慣れていったほうが、機械的な計算を行うよりも楽しく学んでいくことができ、子どもたち同士のコミュニケーションの力も合わせて身につけさせていくことが出来るのである。

本時の内容は「等号・不等号を利用したゲーム」である。「 $3 + 2 = 5$ 」という数式は「3たす2の結果が5」という意味だけにとらえられ、等式本来の「 $=$ 」の右と左はイコールの関係で、左右には無限とも言える数式を入れていくことが出来るという等式・不等式本来の広がりには欠ける面を持っている。一年生のこの時期に等式・不等式を扱い、より拡散的（一通りでない様々な考え）な思考を子どもたちに育てていくことが、その後の学習において、子どもたちの柔軟な思考を育てていくうえで重要だと考えている。

### 5. クラスの実態について

4月に入学してから、わずか2ヶ月足らずの期間であるが、子どもたちは毎日の着替え、授業の準備など驚くほど自分たちの力でできるようになってきている。前に述べたように90分という長い時間の授業においても、まだ休憩を取りながらではあるが、意欲的に授業に取り組んでいくことが出来るようになってきている。また90分の授業ではゲームに取り組む機会も多く、子どもたちはそれを楽しみにしており、学習を通して、クラスの仲間との交流を深まってきている。一方、能力面や姿勢面では差も見られるので、2人指導制を生かして、できるだけ個々に対応していくように心がけている。

下に本クラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）の平均を示した表を載せておいた。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
139.8	142.4	138.5	138.5	136.5	154.2	136.2	133.3	139.1

### 5. 指導計画

- 不等号の意味…………… 4 校時
- 等号の意味…………… 4 校時
- 等号・不等号の活用…………… 4 校時（本時は2校時目）
- 等号・不等号のまとめ…………… 4 校時

6. 本時のねらい：等号・不等号を利用したゲームに取り組んでいくことで、様々な立式が出来ることに気づき、拡散的な思考を育てていく。

### 7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
(1) 等号・不等号の式作りを復習し、いろいろな式が作れることに気づかせる。	(1) 3～5枚のカードを使って等号・不等号の式作りを自由に行い、何通りもの式が作れることを理解する。 ①カードを様々な並び替えて各自式を作り、自分の式を発表する。 ②各自課題に取り組み、式作り慣れる。	(1) 式を発表させることで、様々な式ができることに気づかせるようにする。
(2) ゲームのやり方を通して、与えられた数値で工夫して等号・不等号の式作りを考えさせる。	(2) ゲームのやり方を理解する。指導者と子どもたちが対戦する形式で、与えられた数値で工夫して立式を行い、発表する。	(2) 与えられた数値を使った工夫して式を作らせていく。

<p>(3) ゲームに取り 組ませる。</p>	<p>(3)2人組を作りゲームに取り組む。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(ゲームのルール)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•じゃんけんで勝った方から4枚カードを引き、その4枚のカードをすべて使って等式、不等式を考える。</li> <li>•足し算や引き算だけの不等式は1点 加減が混ざった不等式は1点 等式は2点獲得できるものとする。</li> <li>•何度かゲームを繰り返し、合計の得点が高いものが勝ちとする。</li> </ul> </div>	<p>(3) 子どもたちの能力も考えて組作りを行う。</p> <p>不等式は<math>&lt;</math>、<math>&gt;</math>の両方を用いると、左右を入れ替えただけの式も作ることができるので、<math>&gt;</math>の一方だけとする。</p> <p>2人だけの勝敗だけでなく、クラス全体で各自獲得したポイントも紹介し、クラスチャンピオンも決定する。</p> <p>ゲーム用のカードだけでなく、各自が式作りの時に手元で操作できるカードも用意しておく。</p>
-----------------------------	---	---

## ゲーム・工作科指導案

9:20～10:20: 於ほくと組教室

指導者 歌田翔真  
高橋まり子

### 1. クラス名: はやて組 (1年生)

児童 30名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 140.3

### 2. 授業設定の視点: 創造的知能の育成を目指した学習指導

### 3. 授業の題目: オリジナルけん玉づくり

### 4. 題目について

本校では知能教育の一環として1、2年生を対象にゲームと工作の授業を行っている。ゲームではオセロ、五目並べ、将棋、百人一首などを扱い、そのルールを学び自分なりの戦略を考えさせることやゲームゆえの勝ち負けによる感情を通して、人間性・社会性を育てている。工作では素材の特性を活かした製作活動を通し、作品を完成させていくまでのことを想像し、見通しを持って作業を進められる力を育てている。今回の授業ではオリジナルのけん玉づくりを行う。どんなものを作れば簡単になったり難しくなるのか、どんなものを作れば遊ぶ人が楽しめるかなどを考えて、与えられた素材を活かし、自分だけのけん玉を創意工夫して作っていく。

### 5. クラスの実態

本クラスの児童はどの課題にも興味を持ち活発に取り組んでいるが、特に折り紙をはじめとする紙工作が好きな子が多い。手早く完成させて終わりとするのではなく、より楽しいものを追求し、粘り強く取り組む姿勢が見られる。子どもによって道具の使い方は若干の個人差が見られ、本時のオリジナルけん玉づくりにおいても切ったり貼ったりといった作業に時間を要することが予想されるが、その点においては二人指導制の良い面を活かして、日々一人ひとりの能力に応じた指導を行っている。

尚、本クラスの IQ (知能指数) と FQ (知能因子指数) は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
140.3	150.0	137.0	134.0	137.1	154.1	130.7	137.4	142.4

### 6. 指導計画

オリジナルけん玉づくり…………… 1 校時

オリジナルけん玉づくりと発表…………… 1 校時 (本時)

### 7. 本時のねらい

オリジナルけん玉づくりを通して素材の特性を活かし、創意工夫する力を養う。



8. 本時の指導過程

	活動の内容	指導の留意点
前時まで	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリジナルけん玉づくり 限られた材料を用い各々のオリジナルけん玉を作る。</li> <li>2. けん玉遊び 遊びを通して、改良点を探り、次回への展望をもたせる。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 何種類かの紙の特性を伝え、その特性を感じながら作製できるように促す。</li> </ul>
本時	<ol style="list-style-type: none"> <li>3. 仕上げ オリジナルけん玉を完成させる。</li> <li>4. 自分の作品に名前をつける。 名前を付ける過程で工夫点を考え、自己評価をする。</li> <li>5. 発表 自分の作品をみんなに向けて発表する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 完成品として丁寧な仕上がりを意識させる。</li> <li>• インタビュー形式で、発表しやすいように補助する。</li> </ul>

## 数学科学習指導案

9:20～10:20 於:のぞみ組教室

指導者 渡邊孝典  
三枝大輔

### 1. クラス名:のぞみ組 (2年生)

児童 34名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 142.6

### 2. 授業設定の視点:「何で?」を説明する力を育成する学習指導

### 3. 授業の題目:数学マジックの謎を見つけ出そう!

### 4. 題目について

本校では1年生から4年生までを知能開発期、5・6年生を知能活用期として、8つの知能因子を刺激し、能力をより高める授業が展開されている。知能を刺激する教科としては知能訓練とゲーム・工作だけでなく、各教科でも「考える楽しさを味わう」学習内容を積極的に取り入れている。数学でも計算や図形概念の獲得等、基本的な知識や技能を習得するだけでなく、知能開発と数学的思考力を養成することを目標とし、「教えることより、考えさせること」に重点を置いて指導している。では何を考えさせるのか。それは、目の前の課題(疑問)に対し、一側面からではなく「こうなるということはこうなるかもしれない」「これとこれの共通している所は……」と、多角的な視点から様々な解法を見つけようとするのではないかと考える。

今回の授業では、一つの数字マジックを紐解いていく活動を通し、「何で?」という疑問を出発点に、他者の考えや自分の推論をもとに、論理的に迫っていききたい。

ももとは、子どもが私に持ってきた数字のマジックで、「これはみんなで考えたらおもしろいね!」と感じたことが出発点であり、本時の教材として選んだ。

2年生では、“なんで?”を説明することは困難かもしれない。しかし試行錯誤し子ども達から出される意見を紡ぎ合っていきたい。

### 5. クラスの実態

本クラスの児童を担任して二年目となる。一年生の頃より、数学の“授業”への興味関心が高く、取り組みは大変意欲的である。中でも、算数・数学における重要な言語表現(「例えば～」 「なぜなら～」 「～だとしたら……」等)を用いての発表活動を大切にしてきた。

子どもによっては語彙量や知識、計算力、思考力など個人差が見られるが、「学びあう」構えを持ち、一人ひとりの能力を引き出していけたらと考えている。

尚、本クラスのIQ(知能指数)とFQ(知能因子指数)は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
142.6	147.0	134.4	146.4	133.1	147.2	143.7	147.5	141.4

6. 指導計画

トピック教材 1時間 (本時)

7. 本時のねらい

マジックの謎 (タネ) を自分なりの言葉で説明しようとする姿勢を養っていく。

8. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点及び留意点
<p>(1) マジックのきまり、流れを理解する。</p> <p>(2) 数回の検証を通して、見通しをもって自分なりの意見を考えさせる。</p>	<p>～えっ？なんでわかったの？～ マジックの謎に迫っていこう！</p> <p>① 好きな3ケタの数字を言ってもらおう。</p> <p>② その数字の百の位と一の位をひっくり返して、元の数から引き算をする。</p> <p>③ ②で出た答えを再度、百の位と一の位をひっくり返して、足し算をする。</p> <p>すると・・・出てきた答えは・・・。</p> <p>◎「なぜそうなるか」を考える。</p> <p>〈応用〉 ほかのケタ数でもできないか、考察する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• マジックを見て、「何でそうなるんだろう？」という疑問を共有する。</li> <li>• いくつかの数字で試し、いろいろな場合での予想を整理させる。</li> <li>• 発表を行い、それらに共通しているきまりから、タネに迫っていく。</li> <li>• ケタ数を変えた場合でも同様のことがいえるか考えさせる。</li> </ul>

## 知能訓練指導案

9 : 20 ~ 10 : 20 於 : はやて組教室

指導者 浅利 絵海  
長谷川 眞子

1. クラス名 : はやて組 (2 年生)

児童 34 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 138.8

2. 授業設定の視点 : パズルを通して推理力の育成を目指した指導

3. 教 材 : キューブモザイクパズル

4. 本時刺激される知能因子 : 図形で体系を集中思考する (NFS)

5. 本時のねらい

同じ模様で構成の異なる 8 つの立方体 (キューブ) のピースを使い、どの面を組み合わせると見本と同じ模様が完成できるのかを考えさせることにより、図形で体系を集中思考する力を育てる。

6. 教材について

幼児から大人まで楽しめる遊びの 1 つにパズルがある。「清少納言知恵の板」や「セブンピースパズル」、「タングラム」等、平面のピースを扱ったパズルは、誰もが一度は手にしたことがあるだろう。しかし、本時の教材は、平面ではなく立方体 (キューブ) のピースを使って、見本と同じ模様を作るという本校独自に作成したパズルである。立方体の 6 面は青と黄の 2 色で、塗りつぶし、弧、対角線の 5 種類の模様が描かれている。一人最大 8 個の立方体を使用し、パズルを進める。8 個の立方体は全て同じ模様を使用するが構成は全て異なり、1 ~ 8 の番号が示してある。(8. 本時の指導過程の図 1・2 参照)

課題は、まず 2 面 (上、手前) を見本と同一の模様を作るところからスタートし、3 面 (上、手前、右側)、4 面 (上、手前、右側、左側) と見ていく面の数を増やしていく。また、ピースの個数は立方体 4 個、次に 6 個、8 個と徐々に増やし、難易度には幅を持たせている。ピースの構成には同一のものが無いため、正答は 1 種類しかない。ピース数や見ていく面が増えるにつれて、一つ一つの立方体の構成を考えながら、どの面を組み合わせると出来上がる模様なのかを見極めていく力が必要となってくる。また、着眼点を切り換えて試行錯誤を繰り返し、1 つしかない解決策を推理していくことから、本教材では「図形で体系を集中思考する」力が必要となる。

2 年生という発達段階を考えると、平面の見本から立体をイメージすることや、出来上がりの模様を正確に完成することもかなり高度な思考力を要する。そのため、先ず上と手前の 2 面だけで考える問題から取り組み、どの児童もが自分の力で「できる！」という喜びを味わうことで自信を持ち、学習意欲を高めていきたい。その後、3 面、4 面とより多面的に見ていかなければならないやり応えのある問題にも挑戦していくことで、推理力を育てていけるような授業にしていきたい。

### 7. クラスの実態と指導の観点

クラス全体としては、明るく元気で活発な児童が多い。昨年度からの持ち上がりのクラスで、子ども同士お互いのことをよくわかっている。日々の授業においては、一人一人が課題に興味を持って、楽しく取り組んでいる。4月初めに実施した記号のパズル形式では、難問に対しても最後まで諦めずに一生懸命に挑戦し、「もっとやりたい!」と大変意欲的だった。その一方で、どの課題においても理解にかかる時間の個人差が大きいのが特徴としてあげられる。

下記の表は、はやて組のIQ及びFQ（知能因子指数）の平均である。本時刺激をする因子は、『図形』の領域と『集中思考』の働きである。この表から分かるように、『図形』『集中思考』の平均値はIQとほぼ同じような数値を示しているが、『集中思考』は昨年度から上昇傾向にある。

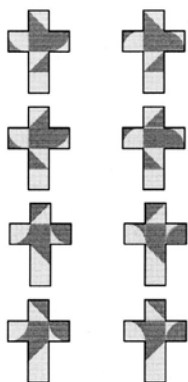
IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
138.8	138.9	136.2	141.5	132.2	141.9	142.5	140.8	136.6

本時はしっかりと題意を把握できるよう導入の説明を丁寧に行い、どの児童もが個別課題にスムーズに取り掛かれるようにしていきたい。また、右側、左側と見ていく面が増えて課題内容が複雑になると苦勞する児童がいることが予想されるが、二人指導制を十分に機能させて、どの児童も達成感が持てるように、それぞれの児童の実態に応じた助言や対応を行っていく。

### 8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点等
<p>1. 挨拶をして、授業に向かう姿勢を整える。</p> <p>2. 導入</p> <p>○ 提示を見ながら指導者の説明を聞き、キューブの面を組み合わせ、見本と同じ模様を完成するパズルに取り組むことを理解する。</p> <p>① キューブの展開図（大判提示）を見て、サイコロは8つあり、その構成は全て異なっていることを知る。</p> <p>② 黒板提示（面、展開図）と大型キューブにより、1つの問題で2面（上・手前）から4面（上・手前・右側・左側）を見ながら完成することを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶をし、授業に臨む姿勢を整える。</li> <li>出席を確認し、本日の健康状態を把握する。</li> </ul> <p>T1：実際に使用するものを大型化した問題提示やキューブを使って、具体的に進め方のポイントを説明し、理解させる。 全体の児童の様子をつかみ、説明が行き渡るようにする。</p> <p>T2：机間巡視をしながら児童の様子を観察し、必要に応じて個別対応する。また、追加説明をした方が良い点などを押さえる。</p>

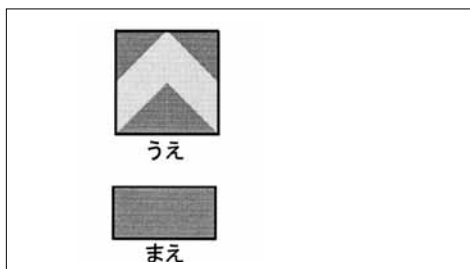
《8つのキューブの展開図》 (図1)



○実際に使用するキューブを受け取り、番号1～4の立方体4個の2面(上・手前)の導入問題を一齐で行い、本時の活動内容を理解する。

《導入問題の内容》

2面(上・手前)4ピース



○個別活動の流れを確認する。

《冊子の内容》 3部構成

冊子1 2面(上・手前)

4ピース、6ピース、8ピース

冊子2 3面(上・手前・右側)

4ピース、6ピース、8ピース

冊子3 4面(上・手前・右側・左側)

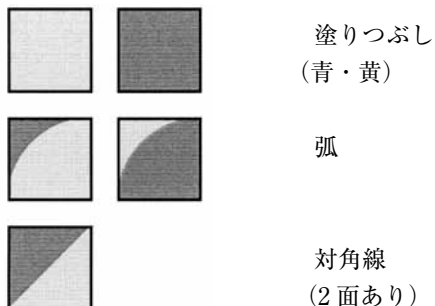
4ピース、6ピース、8ピース

3. 個別の活動を行う。

○進度表に記名後、問題冊子とキューブを使って、それぞれのペースで課題に取り組む。

《キューブの面の模様 5種類》 (図2)

※青と黄の2色



T1・T2: キューブを手分けして配布する。

《導入問題の出来上がりの状態》



※特に以下の点を十分に理解しているかどうかに留意をする。

①指定されたピースを扱っているかどうか。

4ピース(番号1～4のキューブ)

6ピース(番号1～6のキューブ)

8ピース(番号1～8のキューブ)

②それぞれの面を正しく見ているかどうか。

※特に側面の右側・左側の見方

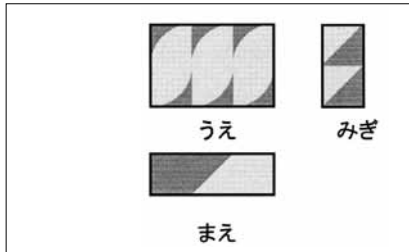
・教材を配布し、個別の活動を援助する。

T1・T2: 進度表を配布し、記名を確認する。

T1・T2: 問題冊子(冊子1)を手分けして配布し、スムーズに活動に取り掛かれるようにする。

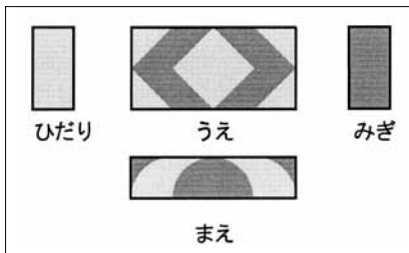
冊子2 問題例

3面（上・手前・右側）



冊子3 問題例

4面（上・手前・右側・左側）



4. 使用した用具を片付け、今日の授業の感想をまとめる。

5. 終わりの挨拶をする。

T1・T2：個々の活動を観察し、必要に応じて確認、助言を行う。

※個々の児童の工夫の仕方を観察する。

※滞っている児童に関しては、段階に応じた助言を行う。

- ①見本と同じ模様になっているか。（向き等）
- ②どのピースから探して完成すると良いか気付かせるような助言を行う。

《冊子2 問題例の出来上がりの状態》



《冊子3 問題例の出来上がりの状態》



T1：片付けの手順を児童に伝える。

T2：使用した用具を片付ける。

T1：児童の感想を聞き、本時の課題がねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。

・終わりの挨拶をしっかり行うように促す。

9. 評価

授業後、本時を振り返り、児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について指導者同士で確認をし、本時のねらいが達成できたかどうかを実践記録にまとめて、今後の実践に活かす。

## 理科学習指導案

9 : 20 ~ 10 : 20 於 : 多目的情報室

指導者 三輪 広明

### 1. クラス名 : くろしお組 (3年生)

児童 32名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 148.7

### 2. 授業設定の視点 : 体のつくりを比較して、進化の過程を類推する指導

### 3. 授業の題目 : 昆虫の進化

### 4. 題目について

これまで、3年次で、「昆虫」の学習で、昆虫の体の作り、様々な活動に適した肢の作り、口のつくりについて学習してきた。また、成長に伴う体の変化について学習していた。それぞれの事実を知ることにとどまっていた。今回、その中に進化という視点を踏まえ、学習を組み立てていこうと考えた。昆虫の祖先がどのような形をしていると考えられるのか、成長の過程を踏まえ考えさせたい。個体発生は、系統発生を再現すると言われている。このことも考えていく上でのヒントとなるであろう。さらに、進化の結果獲得した形態の共通点を見出していくことを通して、どのように進化が進んでいったのかという点についても考察を進めていきたい。より環境へ適応していると考えられるものを求めていくという観点から思考を進めていきたい。

進化とは、身近なところでは、アニメのキャラクターの姿が変わることとして、日常生活の中にも浸透している言葉である。また、「サルはヒトの祖先である。」と言う認識もある。いずれも進化と言うことの正しい認識とは言えない。1つの生物が、長い年月の中で体の様子をえていく、その過程を、考えていきながら、体の特徴をとらえ直していくこともできるのではないかと考える。

### 5. クラスの実態

このクラスは、理科の学習に意欲的な児童が多く、理科室にある書籍を進んで読むなど、自ら探究していく姿勢が強く感じられる。生き物に対する関心も強く、植物の栽培や小動物の飼育にも関心が強い。一斉指導の中では、自分の視点から考えを持って行く面も強い。発想したことを言葉で表現すると言う点では個人差もあるが、発言しようとする意欲の強さがにじみ出ている。言葉にできなくとも、言わずにはいられない意欲のようなものを感じる。それぞれの意見の論点を見出していったときの意見のやり取りは、常識的にとらわれない考えも随所で見られ、考察を深めていくことを助けているように感じられる。

なお、本クラスの平均IQとFQは以下のとおりである。相対的に図形のFQが高く、評価のFQは、これからの伸びが期待される部分である。図などの資料を基にすることで、比較していく面の助けとなるものと考えられる。



IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
148.7	154.3	140.8	151.1	145.6	150.6	150.3	159.6	137.4

## 6. 指導計画（8時間）

- (1) 肢の数から、昆虫と他の生物の分類を行う。…………… 1 校時
- (2) 昆虫の生活の様子を、幼虫と成虫の体のつくりの比較から考察する。… 3 校時
- (3) 昆虫の肢の作り、口のつくりから生活の様子を考察する。…………… 2 校時
- (4) 昆虫の進化の過程を考察する。…………… 1 校時（本時）
- (5) 昆虫についての個別の研究…………… 2 校時

## 7. 本時のねらい

昆虫の学習のまとめとして、昆虫の体の特徴を振り返り、どのような進化の過程をたどったのか、予想してみる。

## 8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
1. 課題の把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">           課題1            昆虫の祖先と考えられる生物はどのような姿をしていると考えられるか。         </div> <p>○ 個体発生の様子から、系統発生の様子を類推する。</p>	<p>○ 翅のない昆虫も含め、昆虫の体のつくりを図で提示する。</p> <p>○ すべての昆虫に共通する形態を取り出していく。</p>
2. 課題の把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">           課題2            代表的昆虫の系統樹から分かれたようすを予想してみる。         </div> <p>○ これまで学んだ生物の幼虫から成虫までの体の特徴から分岐の時期を考える。</p>	<p>○ それぞれの昆虫が、どのような形態を獲得しているのか、根源的な姿がどう変わっていったのか、体の特徴から考察する。</p>
3. 学習のまとめ		<p>○ 学習を通し、わかったこと、疑問に思ったことをまとめさせる。</p>

## 英語科学習指導案

9 : 20 ~ 10 : 20 於 : くろしお組教室

指導者 藤原陽子

### 1. クラス名 : はやぶさ I 組 (3 年生)

児童 17 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 147.1

### 2. 授業設定の視点 : 一人ひとりの個性・関心、能力に応じた英語学習

自分のことを伝えたい、相手のことを知りたいというコミュニケーションの原点を大切にしながら、友達の発話からも学ぶことを意識させるようにしている。そのため、しっかりと聴き、相手に届くはっきりとした大きな声を出すことを心がけさせたい。それぞれの子どもが主人公になれるよう問いかけや教材などを工夫し、自発的で意欲的な取り組みができるように促したい。

### 3. 授業のテーマ : 「At the Zoo」(英語で動物を学ぶ)

### 4. テーマについて

今年から 1 年生 (2 学期から) と 2 年生でも英語の授業が始まった。そのため、この学年が 3 年生で英語をスタートさせる最後の学年になる。

各学年ともテーマを設定し、それにまつわる英語の語彙、表現を学んでいる。テーマの中で繋がった英語から、有機的に深く理解してほしいという意図からである。

テーマは、3 年生では教室の中にあるもの、動物、好きな食べ物、町の中にあるもの、家の中にあるものなど身近なところから始まって、6 年生になると宇宙や世界遺産、環境問題などにも視点を広げる。そして 6 年生の 3 学期にはスピーチコンテストがある。それぞれの子どもが自分で書いた原稿を、それまでに蓄えた英語表現力を発揮しながら発表して卒業していく。

初めて英語を学ぶ今年の 3 年生の 1 学期後半は、Brown Bear, Brown Bear, What Do You See? という絵本を中心にして、動物園で見られる動物の名前や特徴を学んでいく。リズムやイントネーションが楽しい絵本なので、毎年ほとんどの子どもが自然に流れるように言えてしまう。この段階では意味をしっかりと理解するというより、すらすらと言えることを大切にしている。そして 4 年生、5 年生では、野生の動物を英語で知ることへと繋げていく。

### 5. クラスの実態

1 学期前半では教室の中にあるものを中心に学びながら、月や曜日、1 から 12 までの数、教室で使える簡単な表現に触れてきた。多くの歌も歌いながら英語のリズムにも慣れてきている。

授業は、どの子どもも無理なく参加できるように進め、均等に発言の機会が持てるように留意している。

男子は活発で発言も多い。発想が豊かなので気持ちがテーマから少々離れてしまうことも時々ある。女子はしっかりと聴いて理解しようとする子どもが多い。英語に対する興味は男女とも高く、ゲームやアクティビティに積極的に取り組む姿勢が見られる。聞いた英語はすぐに繰り返せる耳

のよさもある。子どもたちの長所を活かしながら指導していきたい。

## 6. 目標

①英語の楽しさを知る。

様々なゲームやアクティビティを楽しむ。

②英語に親しむ。

動物園にいる動物を中心に名前、色、簡単な特徴を表す語彙や表現を身につける。

③英語を読むための準備をする。

アルファベットの大きな文字に触れる。

## 7. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
あいさつ	1 挨拶をする 2 天気、日付等を聞く 3 歌を歌う 4 簡単な会話文の練習をする	・元気に大きな声で発音されているか
アルファベットの練習	5 アルファベットの大きな文字を歌やゲームを通して練習する	・正確に発音できているか
動物の語いや特徴を学ぶ	6 動物の名前や色、体の部位などを練習する 7 絵本やゲーム、活動を通した活動をする	・声が出ているか ・友達の発言に耳を傾けているか
まとめ	8 あいさつ	

## 英語科学習授業案

9：20～10：20 於：はやぶさ組教室

指導者 明石 この実

### 1. クラス名：3年 はやぶさⅡ組

児童 16名 聖徳式（個人）平均 IQ 147.3

### 2. 授業設定の視点：一人ひとりの個性、興味・関心、能力に応じた英語学習

本校の英語の授業は、各ホームルームクラスを二つのグループに分け、1グループ約16人の少人数で行われる。この少人数での授業展開は、45分の授業の中で子ども一人一人に多くの活動・発言の機会を与えている。カリキュラムは基本的には、初めて英語に触れる子どもを想定して組まれているが、近年では既に英語を学んできている子も少なくない。一斉授業では、活動にゲーム性を持たせたり、歌やリズムで一体感を味合わせたりすることで、その差を感じさせずに相互に影響し合っただけで能力を伸ばせるのも効果的なところである。

### 3. 授業のテーマ：「At the Zoo」（動物園で）

#### 4. テーマについて

今回のテーマ「At the Zoo」（動物園で）は、4、5月にテーマとした「In the classroom」（教室で）に続く二つ目の単元である。前単元では、「数字」「曜日」「天気」「あいさつ表現」「教室の中の語彙」などを歌や動作、ゲームを通して学んだ。その基本的な語彙や表現を踏まえた上で、今回のテーマを学習していく。

「At the Zoo」は、「動物の名称」に親しむことを中心とした単元である。絵本『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』（エリック・カール作）を用い、繰り返し読む中で作中の語彙や表現を獲得させる。そして最終的には、全文の暗唱に取り組む。「動物の名称」、「色」また short, long, big, small などの「簡単な形容詞」についても触れながら、発展的に語彙を増やしていきたい。その他「体の部位名」を、歌「Head, Shoulder, Knees and Toes」や「One Little Finger」に合わせて、触れたり指さしたりしながら覚える。アルファベット（大文字）の学習も本単元より入る。文字を見てその名称が言えるように、簡単なゲームを通して繰り返し触れさせ、定着を図る。また、単元ごとに少しずつ「対話表現」も取り入れている。二枚で対応するようになっている絵カードを用い、「Are you ready? - Not, yet.」「Hurry up! - Wait!」「How are you doing? - Pretty good!」などの表現を学ぶ。実際にゲームや日常の活動の中で、自然とこのような言葉が子どもたちから出てくることも多々あるのが興味深いところである。

授業はほぼ英語のみで行っている。英語を聞き、そこから意味を直接感覚で獲得できるように指示の出し方の工夫も考えていきたい。

### 5. クラスの実態

この4月に英語の授業が始まったばかりの3年生は、新しい教科である「英語」に強い関心と

興味を持って取り組んでいる。「3年生」という、まだ周囲に対して開放的な学齢であるからこそ、思い切り動作を付けて歌を楽しんだり、ゲーム活動に熱中したりでき、それが語彙・表現の習得に大きな効果を上げている。またこの発達段階の子どもたちは、とりわけ音に敏感で、模倣を繰り返すうちに自然と英語らしい発音やイントネーションを身に着けていくという実態も、大変興味深い。1時間1時間の授業をとっても楽しみにしている様子である。

## 6. 目標

歌や表現の口頭練習を通して、英語特有のリズムに慣れる。

動物の名称、色、体の部位名、アルファベットの大きい文字を身に着ける。

様々なゲームや活動を通して、英語で話すことの楽しさや話せたことへの達成感を持つ。

## 7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
あいさつ	1 挨拶をする。 2 天気、日付、時刻等を確認する。 3 歌を歌う。	• 元気に大きな声で発音されているか。
アルファベットの練習	4 アルファベットの大きい文字を歌やゲームを通して練習する。	• 定着しているか。
動物の語彙や特徴を学ぶ	5 動物の名前、体の部位などを練習する。 6 絵本を使った口頭練習、ゲーム的活動をする。	• 正確な発音で読めているか。 • 友達の英語にもしっかり耳を傾けているか。
まとめ	7 挨拶をする。	

## 知能訓練指導案

9：20～10：20 於：わかしお組教室

指導者 松尾由香  
地挽裕子

### 1. クラス名：わかしお組（4年生）

児童 34名 聖徳式（個人）平均 IQ 175.3

### 2. 授業設定の視点：数的推理力を通して限界に挑戦することを目指した指導

### 3. 教材：立体数パズル～サイコロの構成を考えよう～

### 4. 本時刺激される知能因子：記号で体系を集中思考する（NSS）

### 5. 本時のねらい

サイコロと同じ構成の立方体2～3個を使用して、各面の目の数の和が指定された数になるような組み合わせ方を考えることにより、記号で体系を集中思考する力を育てる。

### 6. 教材について

知能訓練の教材には、立体図形を素材としているものがいくつかあるが、本時に行うパズルは立体図形としてのサイコロの特徴を生かしながら、数の組み合わせ方や立体図形の構成の仕方をいろいろ考えて、ひとつの解答を導き出していく。

本時ではまず、児童にサイコロの目の数のつき方を知るために1個だけ与える。そして、サイコロの「使う個数」と（2個あるいは3個）、それらがひとつの立体図形としてくっついた時に「上」「右横」「前」「合わさった面」の4つの面に現れた数の和から、サイコロの立体図形の構成と条件を満たすような数の組み合わせ方を考えていく。

このパズルを解くポイントとしては、

- ① 目の数の組み合わせ方を推理して考える
- ② 立体図形の構成の仕方をいろいろな角度から考えていく

という2点が挙げられる。

数の組み合わせを平面的に推理させる課題は以前にも行ったことがある。また、数学の時間にも『魔方陣』という形式で1年生の時から親しんでいる。今回は素材が

サイコロなので、1から6までの数のみの組み合わせとなるため、①については問題なく思考を働かせていくことができると思われる。

②については、数学の授業においては立体図形を取り扱うのは4年生になってからだが、今までに知能訓練の授業において何回か立体図形を扱ったことがある。今回は、サイコロが2段に積まれているのか、横に並んでいるのか縦に並んでいるのかは4つの面に現れた数の和を手がかりとして



〈サイコロ2個で〉

上から見ての合計	1
前から見ての合計	11
右から見ての合計	9
合わさった面の合計	9



【問題A】

考え得る置き方をいろいろとイメージしていく。

そして、両者をばらばらに押さえたのでは解決に結びつかないのがこのパズルの醍醐味と言えるところで、要領よく解いていくためには、サイコロの性質である『向かいあった面の目の数の和は7になる』ことを考え合わせたり、隠された面の数を見通した置き方を考えたりしていくことが必要となる。

このパズルは最終的には数の組み合わせ方をひとつに導くということで、記号の領域の課題として設定したが、図形的なものの見方も重要な要素になっている。いろいろな思考を重ね合わせ、試行錯誤して解答を導きだしていく上で欠かせないのが、自ら創意工夫していく姿勢である。

本校の学習の基本でもある創造的思考を伸ばすためにも、最初は解決の入り口が見えやすい問題から入り、ステップを踏みながら、難しい問題構成にしていくことで、児童一人ひとりが最後まで諦めずに粘り強く取り組み、ひとつの問題を解決していく充実感を味わってくれるものと思う。

## 7. クラスの実態と指導の観点

本クラスはほとんどが3年次から同じメンバーで構成されており、授業においては児童同士が各個人の個性を認めながら各自のペースで能力を発揮している様子が見受けられる。一つの課題に対しての理解力や集中力もあり、楽しみながら考えていくことができる。拡散思考などの発想力の課題では取り掛かりには多少時間を要することもあるが、誰かが答えたところから方向性が見えてくると次に続けとばかりに挙手が増え、意見も広がってくる。どちらかといえばどんどん思いつく拡散思考の課題よりも、解法を一つに絞り込む集中思考の課題を好む。実際、数値から見ても他の知能因子指数より群を抜いている。因みに、本クラスの児童のIQとFQ（知能因子指数）の平均は下記の通りである。




IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
175.3	181.5	172.1	172.1	176.2	178.5	165.3	190.0	166.5

本時のパズルにおいて主に働かせる記号の領域の知能因子指数の平均は172.1、集中思考力の知能因子指数の平均は190.0、関係の深い図形の領域の知能因子指数の平均は181.5と、非常に高くなっている。能力的には高校生レベルの問題にも対応できるということになる。また実際、難問に対する挑戦意欲も十分に感じられる。

その中で留意したいのは、いかに分かりやすく簡潔にパズルのルールを説明し、やる気をかき立てて本題を進めさせていくか。また、どの児童の意欲、集中力も持続するように難易度の適切な問題を設定し、課題数を豊富に用意して、結果はともあれ、問題を解いていく過程において各個人が自分の能力の限界に挑戦したという充実感を持てるよう、配慮したいと思う。

本時は普段の90分授業より短い60分授業であるが、時間内にとどまらず「もっとやりたい」という意欲が継続し、さらに新しいものへの挑戦心を育てていきたい。知能訓練としては最終学年なので、今後に向けてあらゆる知能を学習に活用させる手がかりとなるよう指導を心がけたい。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点等				
<p>1. 授業に向かう姿勢を整える。</p> <p>2. 導入 提示を見ながら指導者の説明を聞き、パズルの手順、約束事を理解する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ア. 個別に1個のサイコロと問題集をもらって進めていく。</p> <p>イ. サイコロを2個、あるいは3個組み合わせる問題がある。</p> <p>ウ. 出来上がった立体図形の「上」「右横」「前」「合わさったところ」の各面にある数字の和を、問題に示されている通りにしていくパズルを行う。</p> <p>エ. 各面に出てきた数字をたし算の形で記録していく。</p> <p>オ. 指導者の確認を受けてから次の問題に進む。</p> </div> <p>《導入問題》</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;">                 〈サイコロ2個で〉                  上から見ての合計    1                  前から見ての合計    11                  右から見ての合計    9                  合わさった面の合計   9             </td> <td style="width: 50%; padding: 5px;">                 答え                  上 _____                  前 _____                  右 _____                  合 _____             </td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">(問題A)</p> <p>3. 展開</p> <p>① 個別にサイコロと問題集を配布する。</p> <p>② 問題に取り組む。 サイコロ2個の問題集から取り組む。</p> <p>• サイコロの組み合わせ方、向き、数の組み合わせ方、先に決めていく面等を工夫してパズルを完成し、記録していく。</p>	〈サイコロ2個で〉 上から見ての合計    1 前から見ての合計    11 右から見ての合計    9 合わさった面の合計   9	答え 上 _____ 前 _____ 右 _____ 合 _____	<p>• 挨拶をし、授業に臨む姿勢を整える。</p> <p>• 出席を確認し、本日の健康状態を把握する。</p> <p>T1：提示用の見本、サイコロを使って説明する。また、各面の見方を、具体例を示しながら確実に理解させる。</p> <p>T2：理解できていない児童には適宜助言する。</p> <p>T1・T2：問題を解決するためにはいろいろ試行錯誤しながら考えることが必要なことを示すのみにする。具体的な考え方は各自が工夫していくよう促す。</p> <p style="text-align: center;">問題Aの解答</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;">                 答え                  上    1                  前    5 + 6                  右    4 + 5                  合    6 + 3             </td> <td style="width: 50%; text-align: center; padding: 5px;">  </td> </tr> </table> <p>T1・T2：各自にサイコロと問題集を配り、内容を確認させる。</p> <p>T1・T2：個々の取り組みを見ながら、必要に応じて適宜助言をする。また、それでもなかなか閃かないようであれば、サイコロを追加して渡す。</p>	答え 上    1 前    5 + 6 右    4 + 5 合    6 + 3	
〈サイコロ2個で〉 上から見ての合計    1 前から見ての合計    11 右から見ての合計    9 合わさった面の合計   9	答え 上 _____ 前 _____ 右 _____ 合 _____				
答え 上    1 前    5 + 6 右    4 + 5 合    6 + 3					



〈サイコロ2個で〉		答え
上から見ての合計	1	上 _____
前から見ての合計	5	前 _____
右から見ての合計	11	右 _____
合わさった面の合計	9	合 _____

- サイコロ2個の問題が終了した児童からサイコロ3個の問題集を渡す。

〈サイコロ3個で〉		答え
上から見ての合計	18	上 _____
前から見ての合計	2	前 _____
右から見ての合計	14	右 _____
合わさった面の合計	16	合 _____

#### 4. まとめ

- ①各自の使ったサイコロ、問題集を片付ける。
- ②今日のパズルについての感想を述べる。

答え
上 <u>1</u>
前 <u>3 + 2</u>
右 <u>5 + 6</u>
合 <u>6 + 3</u>



- T1・T2：終わった問題集と次の問題集を取り換えて渡す。

答え
上 <u>6 + 6 + 6</u>
前 <u>2</u>
右 <u>4 + 5 + 5</u>
合 <u>5 + 4 + 3 + 4</u>



- 本日のパズルについて感想を聞き、まとめる。
- 本時の課題のねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。

## 9. 評価

児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について指導者二人で分析し、ねらいを達成できたかどうかを実践記録にまとめ、今後に生かす。

## 知能訓練指導案

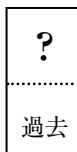
9：20～10：20 於：はまかぜ組教室

指導者 砂 廣 芳 子  
白 田 愛 実

1. クラス名：はまかぜ・わかしおB組（4年生）  
児童 33名 聖徳式（個人）平均 IQ 141.7
2. 授業設定の視点：概念で関係を拡散思考することで創造的知能の開発と育成を目指した指導
3. 教材：『概念ドミノゲーム』
4. 本時刺激される知能因子：概念で関係を拡散思考する（DMR）
5. 本時のねらい

言葉の意味を柔軟に捉え、よりたくさんの言葉の関係を考え、ドミノ形式で言葉のカードをつなげながら概念で関係を拡散思考する能力を育てる。

### 6. 教材について



上記のカード「?—過去」で、「過去」に関する言葉、「?」に当てはまる言葉を考えるとしたら、どんなものが考えられるだろうか。

『昔—過去』、『未来—過去』、『現在—過去』等、たくさんの言葉を思いつく。これは「概念で単位を拡散思考する」知能因子である。本教材の知能因子は「概念で関係を拡散思考する」という知能因子で、「2つの言葉の関係を出来るだけ数多く考えることをねらいとしている。本教材は、《写真1》のように、ドミノ式にカードをつなげることで様々な言葉の関係を考えていく。横に繋げれば『未来—過去』の反対語の関係を捉え、『明日—昨日』といった同関係の言葉をつなげていく。連結部分は必ず何らかの関係があることが条件で、つなげ方は無限に考えることが出来る。



《写真1》

また、グループでリレー形式にすることで、協力しながら「言葉ドミノの樹」を完成していけばと考える。知能教育の根幹は、主体的に学ぶ姿勢の育成（教える事より考える力を重視）、個性の伸長と知能教育を基本にした教育のことである。「これが正答である。」という課題ばかりが刺激ではないことは言うまでもない。ゲームを繰り返していき、友達の発表等でも様々な考え方に触れ、一人では味わえない刺激を経験できればと考える。

《使用するカード》 一人分 48枚



{ 片側に言葉があるカード 24枚  
無地のカード 24枚



《写真 2》

## 7. クラスの実態と指導の視点

本校では3年次からの知能訓練の授業は能力別クラス編成であり、本クラスも4年次の年度初めに再編成された。日々の授業態度は大変落ち着いており、どの児童も課題に対して粘り強く、黙々と取り組んでいる。特に認知や集中思考の働きの課題では、適宜質問もしながら、90分間集中して解決に結び付けていこうという姿勢が整っている。

本クラスの児童のIQとFQ（知能因子指数）の平均は、以下の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
141.7	145.8	131.9	147.4	147.0	137.3	138.2	152.5	133.4

本時に刺激する「概念」の平均FQ（知能因子指数）は147.4で、他の知能因子指数に比べて高い数値を示しており、興味関心が強い児童が多い課題の1つと言える。一方で、「拡散思考」の平均FQは138.2で、まだまだ刺激を必要とする知能因子である。

今回はグループ対抗のゲーム形式を取り入れることにより、友達同士で刺激し合いながら、個々の柔軟な閃きを積極的に出していききっかけにしたい。慎重で消極的になりがちな児童もいる為、指導者は適宜声掛けをし、ゲームを楽しみながら大いに能力を発揮できるよう指導にあたりたいと思う。

## 8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
<p>1. 授業開始の挨拶をする。</p> <p>2. 導入 《概念ドミノゲーム》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>指導者の話を聞き、本時の内容を理解する。</li> <li>下のカード2枚を黒板に提示し、言葉の関係を捉えてカードをつなげていくことを知らせる。</li> <li>4色のカードで各自に色があることを伝える。</li> </ul> <p>《提示カード》</p> <div data-bbox="322 691 510 948" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>「未来—過去」につながるカードを考る。</li> </ul> <p>《ゲーム》</p> <p>つなげかたのルール</p> <div data-bbox="182 1141 659 1344" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p style="text-align: center;">つなげかた</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>つながる言葉は関係があるようにする。</li> <li>つなげるときに理由を必ずいうこと。</li> <li>同じ言葉は使用しない。</li> </ul> <p style="text-align: center;">※同音異義語では意味を変えてもよい。</p> </div> <p>3. 1回戦目のゲームを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3～4人チームに分かれ、3もしくは4色の色画用紙カードを準備しゲームが行えるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T1：出席を取り健康状態をみる。</li> <li>T1・T2：授業の構えを導く。</li> <li>T1：導入が見えにくい確認をしながら導入を行う。</li> <li>T1：黒板に説明用ゲームカード2枚を提示し、実際にゲームを進めながらわかり易く説明していく。</li> <li>T2：机間巡視をしながら、子どもが説明に集中できているか確認する。</li> <li>T1・T2：2人でゲームのシミュレーションを行いながらルールのポイントを簡潔におさえさせる。</li> <li>T1：いろいろな角度から言葉の関係を考え、組み合わせ方を考えさせていく。</li> <li>言葉を様々な方向から考えてもよいこと、(同音異義語のように)については児童が気づけるように留意し、出来れば確認する。</li> <li>T2：対戦相手としてゲームの流れに応じ、児童の意見を聞きながらカードに文字を記入して進めて行く。</li> <li>1回戦目のゲームに取り組ませる。</li> <li>T1：チーム分けをして、座席の移動を指示する。</li> <li>T2：児童が混乱なくゲームに入れるように、様子を見ながらカード、セロテープ、記録用紙を配布する。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>① 3～4人1組で行う。</li> <li>② じゃんけんをしてカードの色と順番を決める。</li> <li>③ 一番の人から順番に、場札に考えたカードをおく。</li> <li>④ 次の人は、場にあるカードにつながる言葉ができるようにカードに記入し、テープでつなげていく。</li> <li>⑤ 同様にして、次の番の人もカードをつなげていく。</li> <li>⑥ チームでリレーをしながら、より多くの言葉カードをつなげ、「言葉ドミノの樹」を作っていく。</li> <li>⑦ 20分経ったら終了する。</li> <li>⑧ 記録用紙に個々のつなげた枚数を記録する。</li> <li>⑨ チームごとにどのような言葉の関係を考えたか、発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• T1・T2：2人でつなげ方に無理がないかなど確認しながら机間巡視する。</li>   <li>• T1：20分経ったら、チームごとに発表することを伝える。</li>   <li>• T1・T2：黒板に貼っても大丈夫なように、各グループの「ドミノの樹」を確認をする。</li>   <li>• チームごとに発表させる。</li> <li>• T1：グループごとにスムーズに発表が出来るように配慮する。</li> <li>* チーム内で上手にリレーをしながら言葉をつなげていけたか確認する。</li> <li>* 独創的なつなげ方等あった場合は紹介する。</li>   <li>• T1・T2：各チームの「ドミノの樹」を戻し、2回戦目を行わせる。カードが少ないチームには補充カードを渡す。</li>   <li>• バリエティに富んだ関係を考えられたチームの言葉ドミノを発表させ、本時の課題のねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。</li>   <li>• 終わりの挨拶をしっかりと出来るように促す。</li> </ul>
<p>4. チームごとに発表をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• どのような理由で関係を考えたかを発表していく。</li> <li>• 合計で何枚つなげていけたかも発表する。</li> </ul>	
<p>5. 2回戦目を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 1回戦目の「ドミノの樹」をさらに大きな樹にしていく。1回戦目同様に20分程度行う。</li> </ul>	
<p>6. まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 用具の片付けをする。</li> <li>• どんな言葉ドミノができたか発表しあう。</li> <li>• 感想を述べる。</li> </ul>	
<p>7. 終わりの挨拶をする。</p>	

## 9. 評価

授業後、記録写真等で本時を振り返り、子どもたち一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について、指導者同士で確認し、本時のねらいが達成できたかどうか分析し実践記録にまとめて今後の実践に活かす。

## 地理科学習指導案

9:20～10:20 於:あずさ組教室

指導者 松崎 昭彦

### 1. クラス名:あずさ組 (5年生)

児童 31名 聖徳式(個人) 平均 IQ 162.6

### 2. 授業設定の視点:創造的知能の開発と育成を旨とした学習指導

### 3. 授業の題目:地形図から読み取る地域の変化

### 4. 題目について

本校地理科の基本的な考え方は、創立当初の次の文章に示されている。

『現在の小学校における地図学習は、社会科の中で行われ、「近所のくらし」などから始まっている。絵地図に発展し、山に登って展望するといったことから、地図の概念に導入しようとしている。英才児の場合、こうしたまわりくどい方法は、ほとんど必要がない。たとえ多少必要があったとしても、それは極めて短時間で習得するであろう。(中略)アメリカの調査などによっても、英才児は地図に対して異常な興味を示すものである。これは英才教室でも見られることであり、3・4歳頃からよろこんで地図に取り組んでいる。そんなわけなので、英才小学校では、社会科を地理と歴史に分けて行い、地理の場合は、とりあえず地図学習に中心点を置いているのである。地図というのは、(1)凸凹のある地球表面を仮想の球面上に投影し、次に(2)この仮想の球面を平面に置き換え、さらに(3)この表面を適宜に縮小したものである。そして、そのためにいろいろな約束や記号が用いられて、地図表現が生まれることになる。このような約束や記号を理解することによって、地図を見るものは平面的な地図から立体的な空間事象を見通すことができる。そこに等高線とか縮尺とかいう問題が横たわり、英才児のたいへん面白い課題となる。』(昭和44年11月20日発行「英才教育の道」55頁～56頁、横浜国立大学教授、同附属小学校校長(当時)野村正七氏の文章より)

このように、本校地理科のカリキュラムは地図学習を中心に組まれており、3年生で地図記号をはじめとして地図の基本的な見方を学習し、4年生では実際に国土地理院発行の二万五千分の一地形図を使って、学校周辺あるいは林間学校で行く志賀高原の地形について学んでいく。

本時の主題は、そうした地図学習および5年生での「産業」の学習を統合・発展させたものである。具体的には、新旧2枚(昭和20年と平成13年)の地形図を比較することで、時代の移り変わりにしたがって地域がどう変化してきたのか、またそこに住む人々の暮らしはどう変わってきたのか、そうしたことを総合的にとらえさせたいと考えている。

### 5. クラスの実態

しっかりと考え、落ち着いて学習に取り組める児童が多いクラスである。また、積極的に挙手して意見を言える子どもも多いが、一方で教員や友達の意見を聞くことに重点を置いている子どもと

大きく二分される。

本時の教材については、まず各自がじっくりと地形図を読み、変化のポイントに気づくことが重要である。このクラスは、下のように、図形のFQが高いので、その点では大いに期待が持てる。いろいろな観点からの気づきがあるものと思われる。また、それを全体のものにするために、なるべくたくさんの子どもの発言を引き出したいとも考えている。

なお、本クラスのIQとFQ（知能因子指数）の平均は次のとおりである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
168.7	180.6	162.2	163.2	174.1	163.5	159.3	173.1	163.5

## 6. 指導計画（2時間扱い）

地形図から地域の変化を読み取る…………… 2校時中本時は1校時め

## 7. 本時のねらい

新旧の地形図を比べて、変化に気づき、その要因について考える。

## 8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
1. 2枚の地形図から、その違いに気づかせる。	○2枚の地形図を見て、なくなったものや新たに見られるようになったものを探す。	○初めは目立つものでよいのでたくさん見つけさせる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>予想される発見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中島飛行場が武蔵野中央公園になった。（なぜ飛行場があったのか？）</li> <li>・中央線の北側に線路が2本あったが今はない。（何のための鉄道か）</li> <li>・西窪という地名が西久保に変わった。（「窪」の意味は？）</li> <li>・市役所の位置が変わった。</li> <li>・浄水場は昭和20年にすでにあった。</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p> </div>		
2. 各自の発見を発表させる。	○気づいたことを発表する。	○出た意見を、観点別に整理して板書する。
3. 疑問点を整理させる。	○見つけたことだけでなく、その意味や理由についても考える。 (例) 上記「予想される発見」内の( )部分など。	○その場で解決できないものは、次の課題とする。

## 理科学習指導案

9 : 20 ~ 10 : 20 於 : 理科実験室

指導者 米 持 勇

### 1. クラス名 : やくも組 (5年生)

児童 31 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 163.0

### 2. 授業設定の視点 : 立案した実験の考察から科学的思考力を育てる学習指導

### 3. 主 題 : 物体によって水に沈む速さの違いが生じる原因を探る。

### 4. 主題について

本校理科の教育課程では、2～3年生において創造性・拡散思考・評価力を主として知能開発し、4～6年生においては獲得した知能を活用させて総合的に考える力を養い、理科的な思考力を育成している。特に5年生では、関連付け・視点の転換・一般化・時間の流れを意識するという場を授業で多く設定している。今回の主題は本校のカリキュラムでは扱っていないトピック的な内容であり、沈む速さの違いについては、重さの大きいものがより速く沈むだろうと考えるが、空気中と同じように抵抗が生じることに気が付くことや、それ以外にも速さに影響する要因があるのかについて、どのように予想を持って検証していくかが興味深いところである。重力、浮力、水の抵抗という概念は指導せずに（密度や浮力については本校では6年生で学習）普段身の回りで起こっている現象と結び付けて、予想、考察しながら実際に確かめ自分なりに法則や決まりを導き出したい。

### 5. クラスの実態

理科の学習に興味関心が高いクラスで、毎回意欲的に課題を探求してく姿勢が見られている。また、楽しく活発に学習できる雰囲気があり、自分の考えをしっかりと持ち発表できる児童が多い。疑問に対しても教えられるのではなく、自分たちで調べていきたいという姿勢が強く、そのため実験観察に対しても関心が高い。授業の話し合いでは、科学に対する知識が豊富な児童もいるが、先入観や周囲の意見にとらわれない物事の見方ができる児童もいる。今回はこうした児童の思考力が大いに発揮できるのではないかと期待できる。なお、本クラスのIQおよびFQ（知能因子指数）の平均は以下のとおりである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
163.0	169.2	161.1	158.5	163.9	168.4	153.5	173.5	155.8

### 6. 指導計画

- (1) 物が水に沈む速さを調べるための実験計画を立てる。…………… 1 校時
- (2) 実験を行い結果から検証する…………… 1 時間 (本時)



### 7. 本時のねらい

- 各班で計画した実験を行い、水に沈む速さの違いについて調べる。
- 実験の結果から水に沈む速さの違いが生じる原因を考察し自分なりの法則決まりを見つける

### 8. 本時の指導過程

ねらい	学 習 活 動	指導の重点及び留意点
1. 本時の課題を把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     水に沈む速さの違いが何で変わるのか                 </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 実験の計画を確認して班ごとに実験を進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 安全に留意し、水の扱いに注意させる。</li> <li>• 調べたい条件だけを変えて比較するようにする。</li> </ul>
2. 結果の発表と考察	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">                     重さを同じにして沈む速さの違いを比べよう                 </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 実験の結果から考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 沈む速さについて時間を計測できるようにする。</li> </ul>
3. 学習のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 分かったこと、疑問に思ったことをまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 大きさ、重さだけでなく形にも着目させる。</li> </ul>

## 国語科学習指導案

9：20～10：20 於：つばさ組教室

指導者 内藤 茂

1. クラス名：つばさ・みずほA組（6年生）

児童26名 聖徳式（個人）平均IQ194.7

2. 授業設定の視点

漢詩から視覚的イメージを持ち、創造的知能を育成する。

3. 教材：漢詩

4. 目標：対句の視覚イメージを駆使して、漢詩を完成させる。（構え）

5. 主題（教材）設定の理由

・教材観

【カリキュラム上の柱】

国語の教材となる文学には、様々な仕掛けがあります。本校では、その仕掛けを読み解くことを「構え」の領域として位置付けています。国語教育の中でこのような領域を設定しているのは本校独自のものですが、併せて知能教育としてのねらいも内包しています。

母の野や 闇見し鹿が ただ進む

句に隠された仕掛け → 「はは のの やや みみ しし かか たた すす む」

知能教育のねらい → 記号で関係を認知する（CSR）

3 3 7 3 2 1 3 1 + 8 0 3 7 4 5 4

句に隠された仕掛け → 「さざ波に 膝ひたす我 みなし子よ」（解説）

知能教育のねらい → 記号で転換を集中思考する（NST）

今回の教材を選んだ理由として、国語科教育独自の「構え」（作者の仕掛けを読み解く）のねらいと、知能教育としてのねらいの両面からわかりやすいものであると考えました。

【漢字の視覚イメージ】

恐山 石石石石 死死死 川上三太郎

これは、下北半島の霊山・恐山（おそれざん）の情景を描いた有名な俳句ですが、この漢字の羅

列をイメージとしてどう捉えるかによって、知能因子の刺激は変わってくると言えます。

漢字自体は「記号」の因子として取り扱いますが、恐山の累々と広がる石山の風景と情念としての「死」の光景としてイメージすれば「図形」の因子の刺激となりますし、具体物としての「石」と精神世界の「死」を結び付けてイメージすれば「概念」の因子の刺激となるでしょう。いずれにしても、恐山の光景を眼前にしてこの句の価値がわかるわけで、知能の働きでどう感じるかは十人十色です。つまり、知能の働きとしてこの違いこそが個性ではないか、と考えています。

#### 【対句によるイメージの明確化】

中国語である漢字は一字一音節であることから、漢詩（古体詩）では対句が大きな特色になっています。同じ意味の漢字であっても漢字一字には様々なニュアンスやイメージの違いがあります（「つくる」には「作る」「創る」「造る」とあるように）。

対句とは二つの事柄を漢字そのもののイメージを駆使して対比させるもので、明暗、濃淡、遠近……といった視覚的イメージを喚起します。漢詩の授業は、元来、その読みから入っていくのが定石ですが、読みではなく漢字そのもののイメージ想像し、作者の込めた「思い」を読み取ることが今回の授業の一番のポイントとなります。

日本語での対句は五・七調の美文の中に好んで用いられ「並行の美、対立の美」を浮かび上がらせませんが、ルーツである漢詩の中ではただの表現技法にとどまらず、漢字の持つイメージ性と併せて対句によってより視覚的光景が明確化すると考えられています。どの漢字をどのように配列するかは子どもにとってはパズル的な感覚となりますが、そこに浮かび上がった風景は一人ひとりの知能の個性といって良いでしょう。

もちろん答えはひとつではなく、子どもによって様々なイメージが展開されますが、対句という装置を通してより明確となるイメージを求めていくことが今回の学習活動の中心となります。

#### ・児童観（クラスの実態）

4月に当該クラスでは「短歌・俳句・川柳」を定型詩の学習として取り扱いました。

#### 【発問】「昼からは ちと陰があり 雲の峰」（小林一茶）

この俳句の中に、いくつの生き物が隠されているか探さない。

指導のねらいとしては、「俳句の遊び心に気づく」というもので、解答は「ヒル」「蚊」「蜂」「トカゲ」「蛾」「蟻」「蜘蛛」「ノミ」となり、これは知能教育（言葉遊び）の観点からすれば「記号で単位を認知する（CSU）」となります。子ども達は率直に言葉あそびとして喜びましたが、その時、ある子どものつぶやきを聞いてハッとしました。「小林一茶って有名人のくせしてふざけてるよ。だいたい、僕の嫌いな生き物ばかりだ……」

実はこのつぶやきにこそ文学的な仕掛けがある、と気づかされたわけです。

小林一茶は小さな弱い生き物を擬人化し、その思いを込めています。（例：痩せ蛙負けるな一茶ここにあり）この句に隠された生き物はすべて人間の嫌われものばかり（生物としては平等なのに……）。一茶の歴史に残る俳人としての真骨頂です。まさに「子に教えられ」た思いでした。

先に挙げた恐山の句を取り上げた際も、子ども達は「死」のイメージ化に苦勞していましたが

「石石石というのが私たちの住んでいる現実世界の風景で、死死死というのは境界線の向こうの霊の世界じゃないですか」という女子の意見は卓越したイメージ力を感じさせ、今回の授業でも活躍が期待できます。

○ 6年つばさ・みずほA組 知能プロフィール

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
194.7	202.7	190.7	190.3	196.4	203.7	186.4	198.7	188.3

教科のクラス分けはIQで分けているわけではありませんが、6年生のAクラスだけあって平均IQ自体がほぼ上限に達しています。FQのバランスが整っているため、特徴的な発言が直接どの知能因子につながっているかはわかりづらいのですが、「漢字の配列」を図形的に捉えるか、概念で捉えるか、直感で感じるか、理屈で考えるか、その子の知能の個性に関わってくると考えられます。

6. 指導計画

- ① 定型詩としての漢詩（韻と対句）
- ② 漢字から視覚的に風景を想像する
- ③ 漢詩の対句からイメージを明確化する（本時）

7. 本時の目標

漢詩の対句から風景を想像し、詩に込められた思いを読み取る。

8. 本時の指導展開

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 漢字から視覚的イメージを思い浮かべる</li> <li>○ 漢字の句から風景を思い浮かべる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習開始の挨拶</li> <li>○ 素読（老子ほか）</li> <li>○ 「<b>風 風 風</b> 風は 天の<b>膏薬</b>」（草野心平）の詩を掲示し、<input type="text"/>内の言葉を考え、発表する</li> <li>○ 「一庭新樹 弾陽光」（いってしんじゅ ひをはじく）から場面を思い浮かべ、自分の言葉で詩にする ・「庭いちめんの新緑が初夏の陽をはじくようす」（元気 若い 勢いがある…）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 山村暮鳥「いちめんのなのはな」の応用。記号、概念の比喩ではなく漢字から視覚的イメージをつくる イメージ形成のため、青の模造紙に「風」と書いた紙を貼る</li> <li>○ 漢詩から視覚的イメージをつくるのがねらいだが、「自分の言葉で詩にする」ことによって詩の心である一人ひとりの「思い」を明確化する。（国語のねらい「構え」、知能教育のねらい「転換」）</li> </ul>

<p>○漢詩の対句から色のコントラストをイメージする</p>	<p>江碧鳥愈白          こうみどりにしてとりいよいよしろく          山青花欲然          やまあおくしてはなもえんとほっす          （絶句 杜甫より）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対句であることに気づく。</li> <li>・「碧⇔青」と「(鳥) 白く⇔(花) 然ん(燃えん)」の色のコントラストをイメージする。</li> </ul>	<p>○「読み方」や意味を考えさせるのではなく、漢字の配列をどうイメージし、一人ひとりがその光景に何を感じたか引き出していく。（これ以後の課題も終始この点を授業の軸とする）</p>
<p>○漢詩の対句から時間をイメージする</p>	<p>前不見古人          後不見來者          念天地之悠悠          獨愴然而涕下          （登幽州台歌 陳子昂）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「古人」の意味から、視覚的なものではなく過去と未来であることに気づく。</li> </ul>	<p>○「前後に見られず」という対句から一本の道をイメージするだろうが、時間的な過去、未来に転換できるかどうかが重要である。</p> <p>○第3句が「起承転結」の「転」の構成になっている。</p> <p>○ややねらいから外れるが、こんなとき君たちだったらどうするか、個性が出る。</p>
<p>○漢詩の対句から光景に込められた思いを想像する</p>	<p>牀前看月光          疑是地上霜          举頭望山月          低頭思故郷          （静夜思 李白）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・視覚的イメージから「月光」を「霜」に比喻したことに気づく</li> <li>・対句から第3句、第4句にふさわしい漢字を考え発表する。</li> <li>・「故郷を思い、頭をたれる」とはどのような思いか考え発表する。</li> </ul> <p>○学習終了の挨拶</p>	

## 9. 評価

自分なりの明確なイメージをもって漢詩をつくることができたか。

## 国語科学習指導案

9：20～10：20 於：みずほ組教室

指導者 川口涼子

1. クラス名：つばさ・みずほB組（6年生）  
児童25名 聖徳式（個人）IQ178.5
2. 授業設定の視点：創造的知能の育成
3. 教材：「野原の声」（阪田寛夫）
4. 目標：イメージの共鳴ということを考える（構え）
5. 教材設定の理由

### (1) 教材観

近く結婚する姉のおむこさんの家に遊びに行った主人公の『僕』。そこで『ひょうきんな人』と聞いていたが、眼鏡をかけて不機嫌そうにしている『おじいさん』と二人きりの時間を過ごすことになってしまった。天井まで、古い本が積み上げられた棚に三方から囲まれた暗い部屋。目の前には初対面の不機嫌そうな、自分と年もずいぶんと離れているおじいさん。『僕』は緊張して『おじいさん』の前に小さくなって座っていたことだろう。

一方『おじいさん』のほうも、『僕』と同じように感じていた様子である。時々咳ばらいをし、お菓子を勧め……自分と年の離れた、でも縁のあった子どもを目の前に『おじいさん』も少し緊張していたかもしれない。咳払いやお菓子は、『僕』とのつながりを探す突破口だったかもしれない。やがて、『おじいさん』は考えに考え抜いたであろう『僕』とあまり年の差を感じないであろう話題である「お友達の名前を教えてください」と口にする。しかも、交互に言い合う。ここにも『おじいさん』の「この目の前に緊張して座っている少年となんらかのコミュニケーションをとらなければ」という配慮が感じられる。

『おじいさん』に言われるままに、自分の友達の名前を言い『おじいさん』の友達の名前を聞き……そうしているうちに『僕』は『おじいさん』と自分とのずれを感じる。だが、それが自分の勘違いだったことに気づくが、ラストシーンで『僕』は『おじいさん』がすでに自分とは異なる時間・空間にいることに気づき、「おじいさんの黄色い顔の中に、その時、大学生か高校生くらいの顔立ちが見え」、「みんなを励ます甲高い、元気な掛け声まで聞こえてきた」のである。『僕』は時間と空間とを転換を起こしたと考えられる。そしてそこには『僕』がすでに時間も空間も転換を果たしている『おじいさん』に『僕』の寄り添いが垣間見られるのである。『おじいさん』の『僕』に接点を持つと、『僕』の『おじいさん』に接点を持つとした態度が二人のイメージの共鳴を果たしたと読み取ることができる。

## (2) 指導観

## 3つの『間』について

イメージーションの共鳴。簡単に言えば時間と空間を共有することだが、それを起こすものはないか。『共鳴』なのだから、それは人間同士がお互いに向き合わなければおそらく起こり得ないであろう。つまり時間・空間そして人間（じんかん）の3つが重なり合ったときにそれは起こるのであろう。本文の即して言えば、

時間……家族の話し合いが終わるまで、という限られた時間

空間……『天井まで、古い本が積み上げられた棚に三方から囲まれた暗い部屋』という限られた空間  
この2点でも十分濃密さがうかがえるが、さらにここに

人間（じんかん）……初対面の者同士という距離感。加えて、これから親戚関係を築いていくという前提のある者同士がお互いを理解しよう、つながりを持とうという前向きな気持ち。が加わる。この3つの『間』を丁寧にとらえていきたい。その3つの『間』が、『おじいさん』を先に時間（『野島良治くん』と友達だったころ）・空間（『野島良治くん』と一緒にいた空間）に移動しえたのだろう。そして、人間が、『僕』と『おじいさん』の中で響きあい、イメージの共鳴を果たす。

今回はその主人公と『おじいさん』の「時間」と「空間」と「人間（じんかん）」にどこまで迫れるかということが大きな柱となる。その空気を感じるためにさまざまな体感を今回は授業の中で取り入れていきたい。例えば主人公二人のいる空間を絵に描いてみてもいいし、教室を実際にその空間に近づけてもいい。また、二人の会話を実際に児童が演じることによって内容をより立体的にとらえることも行ってみたい。その中で少しずつ大人になって、より現実世界に近づいている11歳・12歳の子どもたちが英才児としてイメージーション世界にどこまで迫れるかを確かめていく授業としたい。

## (3) 児童観

二人の主人公のいる世界は一体どこなのか。これがこの教材の大きな柱となる。見た目では老人と少年の気づまりなひとときの噛み合わない会話。しかし、少年がそのことに気づき老人に寄り添おうとしたときにもうひとつの世界が二人の間に生まれた。まずは、現実としての二人の世界の確認。現実の世界としての少年が気づいた噛み合わなさ。そして、そこからのイメージーションの共鳴。これを体感を得ながら進めていくことによって、少し国語に苦手意識を持っているBクラスの児童でもより実感をもって物語を読み進めていくことができるのではないかと考えている。

本校の国語教育という観点から見た英才児の特徴のひとつとして、低学年の児童に見られる無意識世界（潜在意識世界）から現実世界への移行が一般的な移行の時期より1年早く住み替えを始める傾向にある。さらに特筆すべきは、この住み替え後も潜在意識世界と現実世界との行き来を絶たないということだ。しばしば起きる時空の転換すなわち、イメージーションの発動が簡単に行えるという点が挙げられる。そうした観点から見ると、本文中で『ぼく』と『おじいさん』の間に起きたことは、児童にとっては身近なことであり、決して空想や作りごとではないことがとらえやすいと考える。

児童は5年次に『さよならの学校』で、慕っていた祖父の死に目に主人公『恭』に起きた不思議

な出来事を考えた。『恭』に起きたことが決して絵空事ではなく自分の世界においてはあり得ることであるということをお互いに知り、自身がトランスフォーメーションを獲得していることを再確認し、それが『密な関係』の上で成り立つことを学習した。本授業ではさらにその感覚を掘り下げ、先に述べた三つの『間』が自分や他者にもたらす影響のとらえと、その感覚を刺激していきたい。

知能構造のプロフィール ―クラス平均―

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
178.5	187.5	173.1	174.7	178.0	186.8	168.0	183.2	176.4

5. 指導計画 (3 間扱い 90 分×1 60 分×1)

- ①② 本文を読み、主人公二人の現実世界を考える
- ③ 主人公二人の時間・空間・人間をとらえ、イマジネーションの共鳴ということを考える……本時

6. 本時の目標

イマジネーションの共鳴という考えに迫ることができたか。

7. 本時の指導計画

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
授業の構えを作る  『おじいさん』のいる時間・空間 『ぼく』のいる時間・空間を考える。	授業開始のあいさつ 素読を読む 本文を通読する  『おじいさん』役・『ぼく』役を決め、二人のやり取りを再現しながら、その時々のお互いの気持ちを確認する。  「野島くん」が出てきた時の『おじいさん』を考える。  『来年は優勝しますよ』と言った『僕』との食い違い。 そして、『僕』の気づき。	前時に描いた主人公二人のいる部屋の絵を見ながら。空気感をとらえながら。  本文にも注目させる。 『突然、普通の言い方に戻って』 『あまりに嬉しそうな声』 『よく聞こえなかったらしく』  『僕はゆっくりとお礼を言った』 『もっと気が落ち着いてきて』



<p>『僕』のアプローチ。 二人に生まれた人間（じんかん）を考える。</p> <p>二人の間に生まれたもの考える。</p>	<p>『その人は、今も走っているんですか』という言葉飲み込んだ『僕』を考える。</p> <p>『おじいさんも、昔、陸上の選手だったんですか。』という質問をした『僕』</p> <p>→『おじいさん』のいる時空へのアプローチ</p> <p>→『おじいさん』を再びその時空へいざなった。</p> <p>↓</p> <p>これがイメージの共鳴をもたらした。</p> <p>授業終了の挨拶</p>	<p>お互いがお互いに接点を持つとしたという点を捉えさせる。</p>
---	---	------------------------------------

## 国語科学習指導案

9：20～10：20 於：学習室

指導者 由里 敏夫

1. クラス名：つばさ・みずほC組（6年生）

児童 11名 聖徳式（個人）平均 IQ 155.3

2. 授業設定の視点

創造的知能の育成を目指し、素読によって慣れ親しんだ宮澤賢治の『雨ニモマケズ』を輪講によって考察する。

3. 題 目：『雨ニモマケズ』

4. 目 標：願いや祈りという感情について深める。（領域「感情」）

5. 教材設定の理由

① 教材観

『雨ニモマケズ 風ニモマケズ

雪ニモ 夏ノア暑ニモマケヌ

ジャウブナカラダヲモチ

欲ハナク

ケツシテイカラズ

イツモシヅカニ笑ツテキル……』

このフレーズはあまりにも有名である。

ここでは、「欲ハナク」・「ジブンヲカンジャウニ入レズニ」・「小サナ小屋ニキテ」・「ミンナニデクノボウトヨバレ」・「ホメラレモセズ」・「クニモサレズ」・「サウイウモノニワタシハナリタイ」と、欲を捨てた自らを表現しようとしている。

初見でこの感想を児童に問うと、低学年では「宮澤賢治は素晴らしい人物」として捉えるが、高学年になるにつれて「このような人物をイメージすることが困難になり、否定的な考えも多くなる」

このように年齢だけ取ってもその評価が異なり、それぞれの立場で意味付けがなされる。

本校では、毎回国語の授業の初めに素読を行っている。（素読については、これまで国語科指導案でたびたび元教諭草野が述べているので、ここでは意味については省く。）この教本である素読読本の第四輯に『雨ニモマケズ』が載っている。そして、本校の4年生以上の児童であれば誰でも暗唱できる。ただ、あくまでも素読としての取り組みで、意味を指導することはなく、自らの気付きで自らが学習していく。しかし、6年生ともなれば必然的に気付きが生まれてくる。

そして、最高学年の3学期に「祈り」としてテーマを設け学習しているのである。

本時の授業では半年早く上記の内容を扱うわけであるが、比喩として理解したり、賢治の憧れであったり、祈りであったりすることに少しでも近づけることをねらっている。

## ② 児童観

上記した通り、このクラスは11名の少人数である。6年生は二つのホームルームクラスを三つの学習クラスに編成しなおして指導している。それで、この中で少数で授業に臨めるクラスは、一人一人に対する学習する環境としてはとても恵まれているのだが、児童の積極性が常にあるわけではない。

しかし、今年の児童は、5年生まで自己主張したいのにできなかった子どもたちが多く、皆が発言することを好み、学習意欲が高く、ここまでの授業でも他のクラスと遜色ない意見交換ができています。そしてこれが、今回輪講という学習方法で授業をすることを決定させた理由である。ただ、心配な点としては、発言し自らの考えを主張することにこれまで慣れていないので、参観者のいる状態で、平常心で学習が進められるかである。

## ③ 指導観

本校の学習では、宮澤賢治の思いを教師が一方的に教えるというような指導をすることはしない。児童自らが気づきの中でどのように考えられるようになっていくのかを確認し、自らの考えたことを周りに提案して、そこで意見の交換を行うことで、更に内容を深めるのである。クラスは幸いにも11名しかいない。この少人数の中で、この取り組みがとても有効になると考える。

輪講では、自分の考えを持ち回りで主張し、それを元にして意見交換をする。そのためには、本時の前に、それぞれが主張し説明する内容を持っていなければならない。そして、自分勝手な主張にならないために十分な詩の読み込みが大切である。

その後、ワークシートに自らの主張と、それを説明するための段取りを行い、予想される質問も想定しておなければならない。

また、ねらいである「願い」「祈り」に迫るための段取りも必要になる。子どもたちの発表の並びを意図的に替えながら、ねらいにせまる必要もある。

本時は、座席を円形に設置して、どの位置からでも講義の立場が取れて、意見の出しやすいものにしていく。

最後に、自分たちで話し合いが展開できるのが理想だが、これは難しい。そのための教師の関わり方を工夫しなければならず、さじ加減が難しくなると思う。

知能構造のプロフィール ークラス平均ー

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
155.3	167.7	149.5	148.6	156.5	161.1	145.6	162.9	150.2

## 5. 指導計画

- ① 詩を読み内容をとらえ、自分の考えをもつ…………… 1校時
- ② 自分の考えを整理し、ワークシートにまとめる…………… 2校時
- ③ 輪講で学習を進める…………… 3校時（本時）
- ④ それぞれの内容を整理する…………… 4校時

## 6. 本時の目標

願いや祈りという感情について考えを深めさせる。

## 7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
①前時までの活動の確認をする	授業開始の挨拶をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>姿勢も含め授業の構えを意識させる。</li> </ul>
②内容に沿って輪講を行い、賢治の考えを深める	1. 『雨ニモマケズ』を群読する。 前時までに完成させた発表内容の最終確認をする。	
③比喩としての捉えを深める	2. ア 発表 イ 内容・質問事項の確認 ウ 意見交換 (上記のア・イ・ウを繰り返す)	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な生活の部分から、 ①自らの質素な生活 ②周りへの無償の援助 ③自然への祈りを中心に考えさせる。</li> </ul>
④賢治の考えを想像する	3. 視点を変えさせ、比喩としての読み取りをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>先の内容を①②③を比喩として捉えさせる。</li> </ul>
⑤まとめ	4. 欲ハナク ミンナニデクノボウトヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ サウイフモノニ ワタシハ ナリタイ を考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>①理想を述べたもの ②心構え ③生きる目的に迫らせる。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業終了の挨拶をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>願いや祈りのテーマにどれだけ迫れたのかを整理する。</li> </ul>

## 8. 評価

願いや祈りのテーマに迫れたか。

# 全 体 会

10：30～11：40 於：講 堂

## 1. あ い さ つ

園長・校長 和田 知之

## 2. 園児・児童発表

5 歳児 歌 唱

4 年生 合 唱

## 3. 研 究 発 表

「聖徳学園における 児童会活動」

—豊かな人間性と社会性を保障する自主的・自治的活動の展開—

児童会担当 板橋 裕之



# 平成28年度の研究活動計画





---

## 研究部の活動計画

---

### 研究テーマ「英才児の創造的知能の開発と育成」

恩田彰先生は創造性を「新しい価値あるもの、またはアイデアを作り出す能力すなわち創造力、およびそれを基礎付ける人格特性すなわち創造的人格」と定義している。つまり、創造性は創造力と創造的人格の総合概念であるということになる。

創造過程という観点から見た場合、この新しさとは、社会的価値基準に照らしたものではなく、個人にとって価値ある新しさという基準が立てられるというのである。これを、自己実現の創造性と言い換えることも出来るわけで、学校教育では特に重視されることになる。即ち、創造活動では独創性が尊重されるから、個性の開発と育成が基本となってくる。これは私たちにとって、創造性を考える際のもっとも基本的視座になるものと思う。

また創造性は、創造的思考、創造的技能および創造的態度の三つの側面からとらえることができるという。この面から見た時に私たちには多くの蓄積があるわけであり、特に知能教育が積み上げてきた成果は言うまでもないことである。

私たちはこれまで、次のような研究課題を挙げて取り組んできている。

- (1) 各教科における創造性教育の実践例の整理 —その因子と方法（技能）—
- (2) 各教科における創造性教育の可能性を探ることと、因子の特定
- (3) 子どもたちの成長と、創造性の相互関連を明らかにすること
- (4) 英才児の創造的思考の実態の抽出
- (5) 子どもの、イマジネーションの問題として捉える方法

これらについては、平成9年度夏期研修合宿の場で、園田元校長より「創造的知能をどのような内容と方法で開発育成するか」の研究の指針として、以下①～④の提案があり、それ以来各場面で、実践・研究を繰り返し行っている。

- ① 知能訓練（知能あそび）による創造的知能の育成と開発
- ② 教科の指導による創造的知能の育成と開発
- ③ 学級活動・委員会・クラブ・自由研究・学校（園）行事等の特別活動による創造的知能の育成と開発
- ④ 個性・創造性を認める環境作り

—お互いを認め合う雰囲気・横並びや同質思考に捉われない価値観等—

(4)の具体的取り組みについては、10年以上前までに遡って、過去の実践研究・授業研究・公開研究発表会・自由研究・特別研究などの中から、英才児の創造性に関わる研究を洗い出している。また、定期テストの成績検討会議に全教員が、特色ある児童の実態を報告する資料『英才児を探るⅡ』も、これまでに形態を変えながら積み重ねてきている。昨年度、新たに「英才児を探る」委員会が新設されたことにより、『聖徳学園における“英才児像”』を集約する体制が整ったので、より内容を明確にしてまとめていきたい。

(5)の具体的取り組みについては、次のa.～d.がある。

- a. 各教科の年間指導計画の中に創造性との関わりを捜していく。
- b. 教科毎に研究テーマを設定し、教科の責任において研究を推進する。
- c. 英才教育の指針を定める基盤を作りつつ進むために、各個人がテーマを決め実践する。
- d. 本校ならではの、教材・授業展開・2人指導制などに重点を置いた授業研究。

---

## 知能教育研究部の活動計画

---

本校では昭和44年から小学校における知能教育の実践研究に取り組んでいる。「知能教育」というのは、文部科学省の学習指導要領の内容にもなく、むしろ教科書もない。従って、教育内容（カリキュラム）から教材・教具まで全て独自に作り上げていかなければならない。

そこで、我が国の知能教育の先覚者伏見猛弥先生の指導を仰ぎ、アメリカのギルフォード教授の知能構造理論に基づき、実践を重ね、知能教育の基礎を築き上げてきた。現在は、2歳児から小学4年生までを対象にして、一貫した教育内容と方法で、「幅の広い思考力の育成」と「創造性豊かな人間性の育成」をめざした研究活動に取り組んでいる。

### 1. 目標及び活動内容

#### (1) 知能因子の分析と教材開発

知能教育の教材・教具は全て手作りのため、週一回の定例の研究会では日々新たな教材開発を中心に行なっている。教材作成においては、次の点に留意して研究を深めている。

- ① 授業のねらい（知能因子）を十分に押さえる。
- ② 子どもの発達段階（興味・知識・思考）を十分に考慮する。
- ③ 単なる子どもの興味だけに流されないで、教育的価値を十分に考慮する。
- ④ 一人ひとりの子どもの能力に十分対応できるように（能力の限界への挑戦）、内容に幅をもたせ、発展性のあるものにする。
- ⑤ 学習の流れに変化をもたせるようにする。
- ⑥ 個別指導について十分に配慮する。

#### (2) 指導技術の向上

知能教育というのは、知識を教えるのではなく考える力を育てるわけであり、必然的に教科の学習指導法とは異なる点が多くなる。そこで毎時間の実践記録を基に、次の点をポイントにして授業研究を深め、指導技術の向上を図っている。

- ① 一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を行なう。
- ② 意欲・集中力を育てる。
- ③ 教えるのではなく、考えさせることに重点を置く。
- ④ 思考過程を大切にす。〔「できた・できない」の結果だけにこだわらない。〕

#### (3) 実践結果の分析と資料作り

### 2. 今年度の活動の重点

- (1) 二人指導などの聖徳の特色を活かした指導方法の研究を深め、指導技術の充実を図る。
- (2) 『聖徳式知能検査法』の実施結果を分析し、充実を図る。
- (3) 個性と能力に応じた指導の充実。
- (4) 授業での実践を通しての研究を継続的にまとめ、次の教材開発や授業に活かす。

---

## 国語科研究部の活動計画

---

### 1. 目 標

- (1) 言葉に先行する精神発達の最前線における児童の成長の課題と児童を接触させることにより、その精神発達を促そうというのが私たちの基本的考え方である。
- (2) そのためには、英才児に特有の思考・感情および意識の発達の実態を捉え、その基礎資料に基づいた教材の開発、授業方法の研究がなくてはならない。

### 2. 研究課題

成長の課題を授業として取り上げるためにはこれに適した素材がなくてはならない。したがって、検定教科書をそのまま使用せず、幅広くさまざまな文章を集め教材としている。私たちには成長課題の特定と教材の選定が何よりも重要なことである。

そこで、人間の意識活動を大きく、感情・思考・構えの三つに分け、これに用具言語を加えた四本の柱によって私たちの国語の学習領域は構成されている。用具言語は言語作業的な領域を含み、主に練習によって習得するものである。言語作法・文法事項・漢字を含む語彙などである。

感情の領域は、感情であるから喜怒哀楽をとという捉え方ではなく、子どもたちの感情発達の階梯を見届ける姿勢をとっている。例えば、「ごんぎつね」はひとりぼっちを、「白いぼうし」は現実・非現実を考えるための材料となる。この場合授業はひとりぼっちをめぐるの、子どもたち一人ひとりの課題、問題点を整理する場となる。思考は感情とともに人間の精神活動の重要な一部である。人間の思考路線を、児童の中に追究する姿勢をとり、一人ひとりの思考の内容・方法・段階に接近している。構えとは、身構え・気構え・心構えなどという感覚構造を示す言葉で、母国語の習得を考えるとき、なくてはならない視点であると考えている。われわれは、生まれたときから、人間らしい対象の定め方を習得し、その対象と人間の交わりにおける人間限定のあり方を構えと呼んでいる。

### 3. 今年度の重点目標

#### ① 聖徳学園が目指す国語科教育の追究

「思考」「感情」「構え」の三領域と「言語事項」を教材の基本構造と捉え、子ども達の成長課題に接近するといった点が本校独自の基本的な考え方であり、その考え方は常に発展するものと考えている。そこで、一方でカリキュラム成立時の考え方に立ち戻るとともに、児童の成長発達という観点から新たな成長要因を追求するとともにそれに見合った教材も積極的に見出していく。

#### ② 教員の指導力量を高めるための研修

上記の通り、本校では、児童の精神発達という観点から領域が設定され、そのもとで教材を分析し、授業展開が考え出されている。また、同時に英才児ならではの発想の仕方をするといったことを考えたとき、教員の指導力量といったことが特に問われてくる。それに見合う研修を積むということである。

#### ③ 卒業論文指導の充実

論文のテーマである「私と言葉」は、ことばを私という主体者との関わりで論ずること、つまり「私と私」「私と他者」「私と社会」「私と自然」「私と歴史」との関わりをことばを媒介にして見つめることにそのねらいがあり、だからこそ、子どもたち一人一人が自分と向き合えるようにすることが大切といえる。

書きながら考える、書くことによって考える、そうすることによってまだ明確にしていなかった問題点をつかんでいく、このような姿勢と能力を6年間かけて指導していく。

---

## 数学科研究部の活動計画

---

### 1. 目標

- (1) 数量・図形などに関する、基礎的な知識の習得や基礎的な概念・原理・技能の理解・習熟を図り、的確に活用して数学的な処理・考えを生み出す能力を養う。
- (2) 数学的な用語や記号を用いることの意義について理解を深め、数量、図形の性質や関係を簡潔・明確に表現し、思考をする能力と態度を養う。
- (3) 事象の考察に際して適切な見通しを持ち、論理的に思考する能力を伸ばすと共に、目的に応じて結果を検証し処理する態度を養う。
- (4) 体系的に組み立てていく数学の考えを理解させ、その意義と方法を気付かせる。

### 2. 指導方針

- (1) 基本的な知識や技能が身に付くように指導していくと共に、知能開発のためにいろいろな角度から考えさせる。
- (2) 教えることより、考えさせることに重点を置く。すなわち、原理や法則を教え込むのではなく、それを児童自身が導き出せるように助長していく。
- (3) 問題解決学習や発見学習に重点を置く。
- (4) 一人ひとりの能力の限界へ挑戦させることと、一人ひとりの能力と個性を啓発し、それに応じた指導を行うために、個別学習に重点を置く。

### 3. 今年度の研究課題

- (1) 各単元と知能因子の関係について探り、創造性を生かした授業形態を追究する。
- (2) 基礎学力の充実及び能力の限界に挑戦させるべく、個々の児童に応じた指導と教材研究を行う。
- (3) 知能開発と数学的思考力の養成に役立つ教材教具の開発と導入。
- (4) 一人ひとりの子どもの個性と能力差に応じたきめ細かい指導を行うため二人指導制のあり方を考え充実を図る。
- (5) 本校独自のカリキュラム・テキスト教材・指導方法の再検討と熟成を図っていく。
- (6) 毎月1回実践報告会を開き、各学年及びクラスごとの指導状況・反応・反省を出し合い、系統的な学習指導の徹底を図る。
- (7) 各指導者が数学の指導に関する自主研究テーマを設定し、年間を通じてその研究に取り組む。また、その成果を互いに発表し検討を行うことにより、力量を高め合う。
- (8) 授業研究の充実を図るために、校内授業研究や教科内での授業研究を行っていく。
- (9) 聖徳の特色ある数学教育を明確にし、推進していく。

---

## 英語科研究部の活動計画

---

### 1. 活動のねらい

- (1) 前年度を振り返り、カリキュラムの精選・吟味を行う。
- (2) 子どもの活動を中心とした授業、教材に留意する。
- (3) 少人数での授業形態を活かし、一人ひとりの個性に合わせた指導に努める。
- (4) 授業形態にあわせた「評価方法」に留意する。
- (5) 異文化に触れる機会、教材の設定に留意する。
- (6) コミュニケーション能力育成のため、スピーチ活動に重点を置く。
- (7) 聞く、話す、読む、書く、の4技能を伸ばすカリキュラムを開発する。
- (8) 外国人教員とともに指導内容・方法・評価について研究する。

### 2. 方法

毎週行われている教科会の中で検討していく。

各教員がお互いの授業を研究し、英語科での共通の課題を見つけ取り組んでいく。

また、外部の様々な研修会等に参加し研鑽を積む。

### 3. 今年度の活動の重点

- (1) 子どもたちの興味関心や発達段階に応じたカリキュラムになるよう、今まで実践してきたテーマや指導内容についてももう一度検討、吟味していく。
- (2) 絵本を中心に、話の内容を楽しみながら、英語の単語や表現をできるだけ自然な形で身につけられるように指導していく。そのための絵本や教材の研究に力を入れていく。
- (3) 教員から一方的な知識を与える講義式の授業に陥らないように、ゲームやその他様々な活動を通して子ども主体の授業になるよう心がける。  
また、小学生は音声面で優れているので、歌やナーサリーライム・ジャズチャンツなどを通し、この時期にしか身につけられない英語の音に慣れさせる。
- (4) 指導内容の検討だけでなく、その内容をどう教えていくかという指導方法について、教科内でお互いに提案し実践する。
- (5) 小学校での英語教育の評価方法を考えるとき、ペーパーテストだけでは測れないものが多々ある。面接試験を行うことで、子どものスピーキングやリスニングの力を知ることができる。その面接試験のあり方についてさらに研究、工夫する。また英語学習の集大成としてスピーチに取り組みせる。
- (6) 現在のカリキュラムに基づいた授業だけでなく、定期的に世界のいろいろな国の人たちと接する機会を持てるような企画を立てる。また、英検などにチャレンジさせ、児童の英語学習の励みとなるようにする。
- (7) 子どもたちが将来、自ら「未来を拓く」ことができるための英語力を身につけられるように、本校独自のカリキュラムを開発、実践していく。

---

---

## 理科教育研究部の活動計画

---

---

### 1. 目標

- (1) 各クラスに応じた授業を工夫し、児童の能力の限界に挑戦させ、学力を保障する学習指導の推進を行う。
- (2) 各学年の発達段階に応じた授業を工夫し2年生から6年生までの系統的な学習指導を目指す。
- (3) 飼育活動や観察会・見学会などの企画を通して、児童の科学や自然に対する興味・関心の向上をはかる。

### 2. 今年度の重点項目

- (1) 英才児の知能を活かした授業の実践  
英才児の創造的思考を引き出すための各学年の指導方法・内容を開発し、その実践を積み重ねる。
- (2) 五感を働かせる学習と ICT 化  
小学生にとって、実際に手に取って調べる体験は原体験として、また、確実な科学認識の上で必要不可欠なものである。一方で、ICT 化は、蓄積した知識や実験結果等を活用していく上で大きな力を発揮するものと考えられる。相補的に学習の為の学年に応じた活用法を探っていきたい。
- (3) 自然観察会の充実  
〈位置付け〉①自然と直接触れる場 ②授業への興味付けの場 ③授業の発展の場  
今年度の主な活動内容（予定）は、以下の通り。
  - a. 植物の観察（3年生対象） ◇川原の草花の観察・スケッチ ……10月15日（2学期）
  - b. 動物の観察（5・6年生対象） ◇野鳥の生態の観察 ……3月4日（3学期）
  - c. 星の観望会（5・6年生対象） ◇月・惑星の観望 ……12月9日（2学期）
  - d. 石の仲間集め（aと同時開催） ◇石の色・粒子などの違い ……10月15日（2学期）
  - e. 川の上流域の観察（4年生対象） ◇川原の石の観察 ……5月21日（1学期）
- (4) 特別授業の企画・実施  
○ SSISS (Scientists Supporting Innovation of School Science) NPO 法人科学技術振興のための教育改革支援計画の特別授業を実施 …… 特別研究理科対象
- (5) 気象観測活動の充実・地震に関する掲示の充実  
東日本大震災をきっかけに、気象観測委員会の活動の一環として、日常的な地震の観測活動に取り組んでいる。

### 3. 継続的に取り組んでいる項目

- (1) 実験技能の向上と安全確保を目指した指導方法の開発。
- (2) 施設を利用した校外授業の充実。
  - 2年生『恐竜』◇国立科学博物館の見学 ……9月15日（2学期）
  - 5年生『星』◇プラネタリウムの見学 ……12月（2学期）
- (3) 飼育活動（水槽）栽培活動（花壇・温室等）に関する研究。温室を活用した学習活動の充実。
- (4) 自然のたより2年生を対象に、身近な自然の観察記録をとり、週に一度、冊子にして配布。さらに発展的に植物画コンクールへの出品。

---

---

## 地理科研究部の活動計画

---

---

### 1. 目標

- ① 「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。  
(2～4年)
- ② 人間関係を理解する上に於いて、自然環境を広い視野からとらえ、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成する。(4～5年)

### 2. 指導方針

- ① 鳥瞰図の視点を獲得し、空間の連続性を意識しながら、地図を豊かなイメージでとらえていく能力を養う。
- ② 地図・統計の取扱いについての知識・技能を獲得し、それらを使いこなせる能力と態度を養う。
- ③ 地図・統計の中から、目的に応じて適切な資料を選択し、信頼性・妥当性を検証した上で、判断の基準の中に組み入れていく能力と態度を養う。
- ④ 諸外国の文化に対する理解を深め、国際社会に於ける日本の役割を考え、国家および世界の一員としての自覚を深める態度を養う。
- ⑤ 日本の国土の保全及び地球規模での環境問題について考える態度を養う。

### 3. 今年度の研究課題と教育活動

- ① 指導内容と教材の精選化  
英才児の地図学習のあり方について、研究を深めていく。  
5年生の産業の学習において、4年生までの学習をより有効に活用するための教材・授業形態を工夫していく。その際、日本と世界のつながりという点も重点の一つとしていく。  
特別研究に関して、特に3学期の世界的な視野での問題解決のためのアプローチについて、さらに充実させていく。
- ② 学校行事と結びつけた効果的な学習の内容と方法の研究  
林間学校・修学旅行などと、地図学習・自然地理・地誌学習との効果的な融合のさせ方について検討していく。また秋の校外授業については、4年生の上下水道、5年生の工場見学などを計画する。
- ③ 巡検（対象：5年生以上の希望者）の充実  
身近な地域での地図の読図など、子ども達の主体的な取り組みを中心にして、毎年行っている。今年度は11月4日を予定している。
- ④ 作品および教材掲示の充実  
スペースを最大限活用しながら、児童の作品や立体地図模型と説明文などを中心に、掲示が学習の意欲付けとなるよう心がける。

---

## 歴史科研究部の活動計画

---

歴史科では、4年生から3年間を通じて、歴史認識に必要なさまざまな思考力を育成することを目標としています。ただ単に知識を蓄積していくのではなく、頭の中に思い浮かべるイメージを大切に、そこから展開される歴史叙述をもっとも重視します。

歴史学習の第1段階は、「想像力の育成」です。過去の出来事という追体験のできないことを、子ども達が思考や体験の中に持っているものの中から、イメージとして再構築することに授業の重点を置いています。具体的には、歴史学習の導入期として物語を通して楽しく達成できるように工夫しています（昔話・人物伝学習）。

次の段階として、「立場や視点を転換してとらえる思考の育成」に重点が置かれます。その時代の人間になったつもりでものを考え、歴史事象を異なった視点から対比する思考の働きです。

こういった指導は、現代的な発想や一面的な思いこみに偏らない柔軟な思考を可能にさせます。5年生での人物伝学習で、吉田松陰と井伊直弼といった対極的な立場にある人物を扱うのは、このような理由からです。

そして最終段階として、「自分なりの課題を見つけ、資料に基づいた論理的な思考」ができるようにめざしています。ここで言う「論理的思考」とは、物事の原因・結果・影響が相互に関連しながら流れていくことを認識させることです。

こういった思考を学習の中で表現するとき、概念があいまいなままに知識を並べていくのではなく、人間が主人公となって自分なりの仮説や歴史叙述ができるように、一人ひとりの特性にあった働きかけを大切に考えています。

### [今年度の重点課題]

#### 1. 「学園のあゆみ」における授業深化をめざす

「建学の精神」を子ども達に伝える……私学においては大変重要な課題です。歴史の授業では、卒業を前に人物伝として「学園のあゆみ」を取り上げてきましたが、さらなる教材研究によって、各学年の段階を追った学習をめざしています。

#### 2. 課外学習の充実

毎年、土曜休みを利用したフィールドワークの特別授業を実施しています。今年に関しては、より広く家庭でもフィールド学習ができるように、「テレビドラマをもっと楽しめる特別授業」というような企画も考えていきたいと思えます。

#### 3. 発表力の育成

グループで調べ学習を行い発表する、という旧来のものから一歩進めて、子どもなりに発表方法を工夫させ、歴史的な出来事を寸劇やコントで発表したり、テーマクイズにしたりという指導にも力を入れています。

#### 4. 世界文化遺産についての興味関心を深める

富岡製糸工場跡に続き、6年生が修学旅行で訪れている松下村塾が世界遺産になりました。これを機会に現在の候補地についても調べさせていきたいと考えています。



---

## 体育科研究部の活動計画

---

聖徳学園では、児童の発達に応じた指導を行い、子ども達一人一人の能力を最大限に発揮できるようにしています。そこで、体育科では、次のことについて指導の重点を置いています。

1・2年生については「遊び」を中心として、子ども達が体育に対して興味を示し、楽しく学習出きるような教材づくりに重点を置いて指導しています。また、3・4年生では「ゲーム」を中心としてルールを守りながら、集団スポーツの楽しさを教えていきます。5・6年生になると今まで学習してきた内容に更に技術的な内容を加えて、基礎を中心に指導しています。

この時期に技術的な内容を学習することで、高学年での発展へと結びついていきます。特に高学年になると授業での工夫が必要になり、『できるようになるためには』どうすればよいのか?などを子ども達が考えられるようにさせることが大切です。

### ○聖徳学園として独自性を出した体育科としてのカリキュラムづくり

子ども達の発達段階を充分把握して、教材の工夫などを中心に、子ども達の意欲づけになるような授業方法を目指しています。子どもにとって、わかりやすく、身につけやすい内容にしていきたいと思えます。

### 体育科行事計画

聖徳の体育行事は以下の3つを行っています。

#### 〈運動会〉10月上旬

毎年、幼稚園と小学校と合同で運動会を行っています。内容については、体育科で検討し、できるだけ新鮮な内容を目指しています。特に児童ひとりひとりが活躍できるように役割を工夫して取り組みの場を多く持たせています。

#### 〈マラソン大会〉10月下旬

マラソン大会に向けて、体育科では練習計画を設定し、実施しています。特に安全面に重点を置き、子ども達が粘り強く能力を発揮できることを心がけています。距離については、次の通りです。

距離：1～3年＝2km、4～6年＝4km

#### 〈スキー学校〉2月中旬

3～5年を対象にして、毎年、3泊4日間のスキー学校を開校しています。場所は長野県北志賀高原にある竜王スキー場で実施しています。自然の冬の厳しさや楽しさを感じながら、高学年は技術の向上、低学年は楽しさを学びながら、スキーに慣れさせていきます。子ども達の様子を見てみると、小学校時代に3回は行けることになり、かなり滑れるようになります。

#### 〈その他〉

この他には、11月23日（祝）に東京都私立初等学校協会の私立小学校との交流として行われる体育発表会にも積極的に参加しています。

---

---

## 音楽科研究部の活動計画

---

---

聖徳学園では「一人ひとりの子どもの個性を育てる」、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」、「豊かな感性と自立心を育てる」の3つを教育目標として掲げています。音楽科ではこの目標のために、音楽への興味関心を持ち、高め、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする習慣と心の育成に努めています。また、音楽の基礎的な表現能力を発達段階に応じて育み、歌い奏でる楽しさを味わえるように留意しています。

日常の授業では主に、低学年は歌唱と鍵盤ハーモニカの演奏を、中学年は合唱とリコーダーの演奏を、高学年では合唱と合奏に取り組んでいます。また、鑑賞や創作の分野も全学年で随時取り入れることで、創造的な考えを伸ばす内容も重視しています。

毎年11月に実施される聖徳祭では、外部の大ホールを貸し切り、クラス発表を主体とした合唱・合奏等の演奏を行なっています。クラス全体が気持ちを合わせ、本番のステージに向けてひとつの音楽を創り上げる喜びを味わう姿は、子どもたちの大きな成長が見られる瞬間でもあります。

「一人ひとりの個性」を尊重しながら、集団でひとつの楽曲に取り組み、創り上げるという活動は、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」ことにも結びつき、さらには「豊かな感性と自立心を育てる」ことへ繋がっていきます。心技体のバランスのとれた子どもの成長のために、現代において音楽という教科の持つ今日的意味・意義は、他の教科と同様に大変重要と考えられます。

### 1. 目標、及び活動内容

様々な音楽活動を通して刺激を与え、感性を育て、基礎的な能力がバランスよく身に着くよう工夫する。また、歌唱、器楽、鑑賞、創作の4領域が持つ多面性を授業の中で効果的に生かせるようにし、それが6年間を通じて体系的に作用するよう考慮する。

### 2. 今年度の活動の重点

- ① 全学年の年間指導内容の精選、及び行事等での活用。
- ② 一斉指導における児童一人ひとりへの確かな技術指導、及び評価方法の研究。
- ③ 学校行事（公開研究発表会、聖徳祭等）における各学年、各クラスに適した選曲。
- ④ 外部講師を招いての特別授業の企画。（4年…リコーダー、5年…和楽器）
- ⑤ 東初協音楽部会主催音楽祭「さあ はじめよう」への参加。（4年）
- ⑥ 希望者を対象とした音楽科フィールドワーク（鑑賞・観劇）の企画。
- ⑦ 入学式、卒業式等における児童の合奏、合唱による行事への参加。
- ⑧ 特別研究では研究や創作の活動を、器楽クラブでは行事における演奏活動をしていく。

---

## 美術科研究部の活動計画

---

### 1. 目的

- (1) 各学年の発達段階に応じた課題やテーマを設定し、のびやかな感受性と豊かな創造力が獲得できるように教材を工夫していく。
- (2) 個々の児童の個性が作品に反映し、よりの確な表現で仕上げたいけるように個別指導を確立していく。

### 2. 今年度の重点項目

- (1) 個性と能力に応じた、効果的な指導を工夫、開発していく。
- (2) 美術に対して興味を湧くような教材及び指導方法を追究していく。
- (3) 落ち着いた雰囲気の中で、児童が表現に取り組めるように、授業の展開を工夫していく。
- (4) 仕上げた作品に対して、自己評価の時間を確保していく。
- (5) 校内の作品展示に接することにより、児童の美術に対する関心や興味が向上し、鑑賞の能力が養われるようにする。

### 3. 研究課題

- (1) カリキュラムについて  
絵画表現、彫刻表現、デザイン、工作の関連性とバランスの配慮及び一貫性を持たせたテーマの展開方法を開発していく。
- (2) 各学年・クラスの実態に見合ったテーマや教材を開発していく。
- (3) 学内展示の充実。児童の作品だけでなく、古今東西の美術作品も鑑賞ができるように展示方法を改善していく。

---

---

## 家庭科研究部の活動計画

---

---

小学校の家庭科においては、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけることや、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にする心情を育むこと、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と態度を育てることをねらいとしています。

本校では5・6年生の子ども達の発達段階と生活状況を踏まえ、一人一人の実態に留意しながら、様々な活動に取り組んでいます。その活動に取り組む中で、特に裁縫などの実習では子ども達一人一人の豊かな創造力を発揮できるよう、個々が工夫できる面を数多く作り、個々の創造性に沿った指導を心がけています。

### 1. 目 標

- (1) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知る。
- (2) 家族の一員としての自覚を持った生活を実感する。
- (3) 自分の成長を理解し、家庭生活を大切にする心情を育む。

### 2. 今年度の活動方針および重点

- (1) 一人一人の児童が意欲的に取り組み、自分の家庭生活をより充実したものにできる力を育てる。
- (2) 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知るために、出来る限り実技の時間を保障していく。
- (3) 基本的な技術は指導するが、工夫できる面は大いに個々の考えを尊重していく。
- (4) 『個』だけでなく、自分と共に生活する家族にも目を向け、『家族』という集団の大切さを意識させる。

# 研究発表会の歩み



## 研究発表会の歩み

### □ 第1回 (1969年)

主 題：学校における英才教育

記念講演 「学校における英才教育」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「国語教育について」	玉川大学 教授	上 原 輝 男
「数学教育について」	早稲田大学 教授	岩 崎 馨
「知能訓練について」	英才教育研究所	清 水 驍

### □ 第2回 (1970年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「英才教育5年間の経過と問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「英研式知能検査法について」	英才教育研究所員	千 葉 晃

### □ 第3回 (1971年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「学校における英才教育の問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「知能検査の問題点」	英才教育研究所員	千 葉 晃

### □ 第4回 (1972年)

主 題：小学校における知能教育

○記念講演 「小学生の知能とその教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
○研究発表 「知能診断と教育評価の関連」	英才教育研究所 研 究 部 長	千 葉 晃
○研究発表 「教科の教育と知能教育との接点」	本校 教務主任	園 田 達 彦
○研究発表 「知能教育のための教材」	本 校 教 諭	小 林 五 郎
	本 校 教 諭	郡 司 英 幸
	本 校 教 諭	成 田 幸 夫

### □ 第5回 (1973年)

主 題：知能と学力

○記念講演 「本校における教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
------------------	--------------------	-------

○研究発表 「知能と学力との接点(1)」 — 知能指数と学業成績を中心にして —

本校教務主任 園田達彦

「本校における漢字指導」 本校教諭 小林五郎

□ 第6回 (1974年)

主 題：英才教育の追究 — 6年間の実践と問題点 —

○研究発表 — 各教科の実践をもとにして —

「数学科教材に対する児童の取り組み方」

本校教務主任 園田達彦

「歴史教育の方法と実践」 本校教諭 大竹良造

「思考の教材をどのように扱うか」 〃 草野修三

「空気の重さを中心にして」 〃 成田幸夫

□ 第7回 (1975年)

主 題：英才教育の追究 — 知能と学力 —

○記念講演 「現代学校と英才教育」

東京学芸大  
学名誉教授 大嶋三男 先生

○研究発表 「知能と学力との接点(2)」 — 知能構造と学業成績を中心にして —

本校主事 園田達彦

○分科会研究発表

国語科 「英才児に於ける感情発達の過程」 本校教諭 草野修三

数学科 「知能因子からみた教材構造」 〃 吉井昇

理科 「理科工作教材を考える」 〃 成田幸夫

地理科 「地図と地球儀に対する児童の認識度」 〃 郡司英幸

□ 第8回 (1976年)

主 題：英才教育の追究 — 高知能児に応じた学習指導 —

○記念講演 「日本教育の課題」

国立教育研究所長 平塚益徳 先生

○研究発表 「知能と行動」

本校校務主任 小林五郎

○分科会研究発表

国語科 「文章理解の方法」 — 子どもの目に捉えられている場面映像はどのようなものか —

本校教諭 葛西琢也

数学科 「数学における英才児の特性」 本校主事 園田達彦

理科 「本校の子どもの理科に関する思考の特性」

本校教諭 成田幸夫



歴 史 「本校歴史科の授業展開」 — 因子別にみた知能の発達段階と

歴史科三段階の目標との関連 —  
本 校 教 諭 大 竹 良 造

□ 第 9 回 (1977年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導 —

○記念講演 「英才教育について」 — 大脳生理学の立場から —

東 京 教 育 大 学  
名 誉 教 授 杉 靖 三 郎 先 生

○分科会研究発表

知能教育「知能教育の必要性」 — 知能の発達過程を中心にして —

本 校 主 事 園 田 達 彦

国語科「知能と読みの接点」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

数学科「数学における英才児の特性とその指導法」

本 校 教 諭 吉 井 昇

理 科「科学的な思考方法と知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 諭 成 田 幸 夫

地理科「地理科における知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第10回 (1978年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(2) —

○記念講演 「学校教育の現状と課題」 — 創造性豊かな子どもを育てるために —

筑 波 大 学 教 授 村 松 剛 先 生

○分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」

園 長 和 田 知 雄

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」 — 意欲と集中力の育成と家庭の役割 —

本 校 主 事 園 田 達 彦

教科教育「知能開発（活用）をめざした学習指導」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

特別研究「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第11回 (1979年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(3) —

○記念講演 「生涯教育と学校」

元 文 部 大 臣 永 井 道 雄 先 生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第12回（1980年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(4) —

○記念講演 「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官 渡辺富美雄先生

○研究発表 「卒業生の状況」— 追跡とその状況の分析 —

本校主事 園田達彦

□ 第13回（1981年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした

学習指導(5) —

○記念講演 「未来をみつめての教育」— 子どもの可能性を育てる教育 —

武蔵野音楽大学教授 大竹 武三先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第14回（1983年）

主 題：英才教育の追究 — 英才教育15周年並びに校舎落成記念 —

低学年：知能開発をめざした学習指導(6)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(1)

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

知能教育「本園における知能教育」

国語教育「本校における国語教育」

数学教育「本校における数学教育」

理科教育「本校における理科教育」

地理・歴史教育「本校における地理・歴史教育」

英語・体育教育「本校における英語・体育教育」

---

□ 第15回 (1984年)

主 題：英才教育の追究

低学年：知能開発をめざした学習指導(7)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(2)

○研究発表「子どものものの見方・考え方」― 国語の授業を通して ―

本校校務主任 小林 五郎

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第16回 (1985年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(1)

低学年：知能開発をめざした学習指導(8)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

○研究発表「個性に応じた歴史学習」― イメージから論理的思考へ ―

歴史科主任 大竹 良造

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第17回 (1986年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(2)

低学年：知能開発をめざした学習指導(9)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(4)

○研究発表「知能開発をめざした学習指導」― 地理・数学の授業から ―

教 務 主 任 郡 司 英 幸

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

---

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」  
低学年教育「知能開発をめざした学習指導」  
高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」  
中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第18回 (1987年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(3)  
低学年：知能開発をめざした学習指導(10)  
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(5)

○園児・児童・生徒発表

- ① 歌と合奏 幼稚園年長組 指導者 鎌田禮子, 松本阿佐子
- ② 英語劇 「The King's New Clothes (はだかの王様)」〈原作アンゼルセン〉  
中学2年生 指導者 米屋清貴, 佐藤久美子, 伊神直彦
- ③ 歌 唱 「山の歌」(夏の山, 山のこもりうた, 山のスケッチ, フニクリフニクラ)
- ④ 児童劇 「ほくたちの……ポチ」〈原作 梶本暁子〉  
小学5年生 指導者 内藤茂, 仁科建司

□ 第19回 (1988年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育  
低学年：知能開発をめざした学習指導  
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

- ① 歌 唱 4年生・指導者：林谷英治
- ② 聖徳学園における英才教育
  - 英才教育の基本方針 本 校 主 事 園 田 達 彦
  - 知能教育 本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸
  - 能力に応じた指導 本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎
  - 個性に応じた指導 歴 史 科 主 任 大 竹 良 造

□ 第20回 (1989年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育  
低学年：知能開発をめざした学習指導  
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

- ① 歌 唱 3, 5 年生・指導者：林谷英治, 関戸道成
- ② 児童劇 4 年生・指導者：板橋裕之
- ③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」

小 松 賢 司 教諭

□ 第21回 (1990年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年：知能開発をめざした学習指導

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

- ① 研究発表「聖徳学園における英才教育」

- 知能開発をめざした学習指導

葛 西 琢 也 教諭

- 一人ひとりの能力や個性に応じた指導

大 竹 良 造 教諭

- ② 児童劇 3 年生あずさ組「半日村」・指導者：松崎昭彦教諭・山本友子教諭

- ③ 歌 唱 4 年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第22回 (1991年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて

○全体会

- ① 講 演「聖徳学園の目指すもの」

— 幼稚園，小学校，中学校，高等学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 和 田 知 雄  
小 学 校 長

- ② 歌 唱 4 年生・指導者：林谷英治教諭

- ③ 歌 唱 5 年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第23回 (1992年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を助長する保育Ⅱ

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めてⅡ

○全体会

- ① 講 演「聖徳学園における幼稚園と，小学校の教育」

— 幼稚園，小学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 園 田 達 彦  
小 学 校 長

- ② 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任 内藤 茂

- ③ 歌唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第24回 (1993年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (I)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (III)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦  
小学校長

- ② 研究発表「英才児の作文から，その個性を考える」

研究主任 葛西琢也  
教務主任 草野修三

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第25回 (1994年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (II)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (IV)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦  
小学校長

- ② 研究発表「英才児は地図をどう描くか — 子どもの空間認識と視点の転換 —」

地理科主任 松崎昭彦

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第26回 (1995年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (III)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (V)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦  
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践  
— 自由研究・特別研究を中心に —」  
特別研究科主任 大河内 浩 樹
- ③ 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第27回 (1996年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：こどもの知能の発達を助長する遊びを求めて (IV)

小学校：英才児の創造性の開発と育成 (1)

○全体会

- ① 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭
- ② 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」  
幼稚園長 園田 達彦  
小学校長
- ③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」  
工作科主任 加賀 光悦

□ 第29回 (1997年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VI)

小学校：創造的知能の開発と育成 (2)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」  
幼稚園長 園田 達彦  
小学校長
- ② 研究発表「創造性と学習 — 数字の実践から —」  
数学科主任 松浦 博和

□ 第30回 (1998年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VII)

小学校：創造的知能の開発と育成 (3)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」  
幼稚園長 園田 達彦  
小学校長
- ② 研究発表「卒業生のその後」  
教務主任 草野 修三

□ 第31回 (1999年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅷ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (4)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦  
小 学 校 長

② 研究発表「聖徳の英語教育」

英 語 科 主 任 藤 石 勝 巳

□ 第32回 (2000年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (IX)

小学校：創造的知能の開発と育成 (5)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦  
小 学 校 長

② 研究発表「歴史における概念形成のための想像力の育成」

歴 史 科 副 主 任 板 橋 裕 之

□ 第33回 (2001年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (X)

小学校：創造的知能の開発と育成 (6)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦  
小 学 校 長

② 研究発表「創造的知能の開発と育成 — 知能訓練の実践から —」

知 能 訓 練 科 主 任 富 永 理 香 子

□ 第34回 (2002年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (1)

小学校：創造的知能の開発と育成 (7)



○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦  
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園小学校の理科教育」

理科主任 三輪広明

□ 第35回 (2003年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（2）

小学校：創造的知能の開発と育成（8）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦  
小学校長

- ② 「創造的知能の開発と育成」— コンクール作品(作文)にみる聖徳児童の創造性—

国語科 内藤 茂

□ 第36回 (2004年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（3）

小学校：創造的知能の開発と育成（9）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

小学校長 園田達彦  
幼稚園長

- ② 「聖徳における二人指導制」— 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の追究—

教 頭 加賀光悦

□ 第37回 (2005年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（4）

小学校：創造的知能の開発と育成（10）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長 園田達彦  
幼稚園長

- ② 数学・個性的な解法— オープンエンドアプローチを通して—

数学科主任 齊藤 勇

□ 第38回 (2006年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（5）

小学校：創造的知能の開発と育成（11）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦  
幼 稚 園 長

② 学習発表「詩のボクシングの実践」— 英才児の個性・創造性育成の場として —

6 年 生 児 童 渡 辺 泰 介  
国 語 科

□ 第39回 (2007年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（6）

小学校：創造的知能の開発と育成（12）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦  
幼 稚 園 長

② 創造的知能の開発と育成研究 — 発明くふう展にみる聖徳児童の創造性 —

研 究 主 任 松 浦 博 和

□ 第40回 (2008年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（13）

個性と能力差に応じた複数指導（7）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸  
幼 稚 園 長

② 知の冒険心を育む学校図書館

司 書 教 諭 江 橋 真 弓

---

□ 第41回 (2009年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (14)

個性と能力差に応じた複数指導 (8)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸  
幼 稚 園

② 聖徳の理科教育について

理 科 主 任 米 持 勇

□ 第42回 (2010年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (15)

個性と能力差に応じた複数指導 (9)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦  
幼 稚 園

② 聖徳の修学旅行

～子ども達が成長する5泊6日～

地 理 科 主 任 松 崎 昭 彦

□ 第43回 (2011年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (16)

個性と能力差に応じた複数指導 (10)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦  
幼 稚 園

② 創造的知能の育成

～幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ～

知 能 訓 練 科 砂 廣 芳 子

---

□ 第44回 (2012年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (17)

個性と能力差に応じた複数指導 (11)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦  
幼 稚 園 長

② 創造的知能の育成 ～豊かな視点を育てる(数学・地理の授業実践から)～  
(幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ)

数 学 科 主 任 細 沼 克 吉

□ 第45回 (2013年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (18)

個性と能力差に応じた複数指導 (12)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦  
幼 稚 園 長

② 未来をひらく戦士を育てるために  
～一年生の学級経営を中心に～

低 学 年 主 任 由 里 敏 夫

□ 第46回 (2014年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (19)

個性と能力差に応じた複数指導 (13)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦  
幼 稚 園 長

② 創造性を育むロボット教育  
～特別研究数学の実践から～

教 頭 和 田 知 之

---

□ 第47回 (2015年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (20)

個性と能力差に応じた複数指導 (14)

○全体会

① 講 演 「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 和 田 知 之  
幼 稚 園

② 研究発表 自分を知るために

～聖徳の国語から～

国 語 科 川 口 涼 子

研 究 同 人

(平成28年度)

[理事長]

岩 崎 治 樹

[聖徳幼稚園]

園 長	和 田 知 之
教 頭	松 浦 博 和
主 任	飯 濱 久美子
副 主 任	永 坂 圭 子
生活指導主任	荒 井 明 子
年 少 担 任	神 山 祐 希 (リトミックあそび・知能あそび)
〃	永 坂 圭 子 (体育あそび・知能あそび)
〃	飯 濱 久美子 (造形あそび・リトミックあそび)
〃	北 村 満利恵 (知能あそび・体育あそび)
年 中 担 任	荒 井 明 子 (リトミックあそび・造形あそび)
〃	園 山 恵理子 (知能あそび・体育あそび)
〃	水 嶋 知 佳 (造形あそび・リトミックあそび)
年 長 担 任	磯 沼 美 紀 (造形あそび・リトミックあそび)
〃	久 保 千 春 (知能あそび・体育あそび)
〃	高 井 正 恵 (リトミックあそび・造形あそび)
専 科	
教 諭	佐 藤 憲 夫 (体育あそび)
講 師	
〃	松 浦 雅 美 (知能あそび)
〃	大 嶋 比 查子 (知能あそび)
〃	伊 奈 恵 理 (知能あそび)
〃	上ノ宮 純 子 (延長保育)
〃	大 槻 妙 子 (延長保育)
〃	柳 澤 由 理 (延長保育)
〃	小 山 玲 子 (延長保育)
〃	小 池 順 子 (延長保育)

[聖徳学園小学校]

校 長	和 田 知 之
教 頭	松 浦 博 和
教 頭	齊 藤 勇
教 務 主 任	粕加屋 直 幸
研 究 主 任	細 沼 克 吉
生活指導主任	大河内 浩 樹
低 学 年 主 任	板 橋 裕 之
高 学 年 主 任	米 持 勇

## 担 任

あさま組 (1年生)	細 沼 克 吉 (数学・地理)
〃	長谷川 和 暉 (国語・歴史・美術)
ほくと組 (1年生)	歌 田 翔 真 (数学・ゲーム工作・美術)
〃	板 橋 裕 之 (国語・歴史・体育)
のぞみ組 (2年生)	渡 邊 孝 典 (数学・地理)
〃	田 中 飛 鳥 (国語・歴史・ゲーム工作)
はやて組 (2年生)	内 藤 茂 (国語・歴史)
〃	桂 田 晶 (数学)
くろしお組 (3年生)	三 輪 広 明 (理科・数学)
はやぶさ組 (3年生)	明 石 この実 (国語・英語)
3年学年担任	谷 口 優 (数学)
はまかぜ組 (4年生)	渡 辺 泰 介 (国語・英語)
わかしお組 (4年生)	米 持 勇 (理科・数学)
4年学年担任	千 葉 安弥子 (数学・家庭)
あずさ組 (5年生)	松 崎 昭 彦 (数学・地理)
やくも組 (5年生)	川 口 涼 子 (国語・家庭)
5年学年担任	佐 藤 憲 夫 (体育)
つばさ組 (6年生)	古 賀 有 史 (英語・音楽)
みずほ組 (6年生)	大河内 浩 樹 (理科・ゲーム・工作・美術)
6年学年担任	藤 石 勝 巳 (英語)

## 専 科

教 諭	三 品 亜 美 (音楽)
〃	高 橋 まり子 (知能訓練・ゲーム・工作)
〃	豊 田 奈都代 (知能訓練)
〃	富 永 理香子 (知能訓練・国語)
〃	地 挽 裕 子 (知能訓練)
〃	松 尾 由 香 (知能訓練)
〃	砂 廣 芳 子 (知能訓練)
〃	浅 利 絵 海 (知能訓練・ゲーム・工作)
〃	白 田 愛 実 (知能訓練)
〃	長谷川 真 子 (知能訓練)

司書教諭 江 橋 真 弓

養護教諭 吉 村 厚 子 (保健)

講 師	由 里 敏 夫 (国語・歴史)
〃	藤 原 陽 子 (英語)
〃	大 嶋 比 查 子 (知能訓練)
〃	松 村 英 恵 (美術)
〃	内 藤 晴 美 (知能訓練)
〃	山 田 桂 子 (知能訓練)
〃	テ ィ ア ヘ イ グ ッ ト (英語)
〃	須 藤 泰 規 (美術)
〃	三 枝 大 輔 (数学)
テ ス タ ー	山 田 多 津 子 (知能検査)
〃	佐 藤 智 子 (知能検査)
事 務 次 長	萩 原 夏 美
事 務	澁 谷 香 耶 (庶務・経理)
〃	小 林 麻 里 (庶務・経理)
環 境 美 化	岩 瀬 勝 彦
〃	小 池 き み 江



第 48 回 公開研究発表会要項

---

発 行 日 平成 28 年 6 月 18 日  
編集企画委員 松 浦 博 和  
飯 濱 久美子  
豊 田 奈都代  
発 行 者 和 田 知 之  
発 行 所 聖 徳 学 園  
東京都武蔵野市境南町 2-11-8  
TEL ( 0 4 2 2 ) 3 1 - 3 8 3 9  
印 刷 所 株式会社 文 伸

---

©2016 (700)